

# 市内遺跡調査概報V

—東木津遺跡・石塚遺跡・下佐野遺跡の調査—

1997年3月

高岡市教育委員会



## 序

高岡市内を北流する千保川は、戸出地区より、佐野地区を経て、高岡市街地に至り、木町にて小矢部川に合流しています。この川はかつての庄川の本流であり、戸出地区や佐野地区は、往古の庄川が形成した扇状地の末端に当たります。

佐野地区の千保川左岸の微高地には多くの遺跡が所在しています。今回報告する東木津遺跡や下佐野遺跡も該当します。またさらに西側、和田川を挟んだ福田地区の微高地には石塚遺跡が所在しています。

これらの遺跡の位置する高岡市街地の南西郊外は遺跡の多い所で、扇状地末端の微高地を利用して、多くの人々の活動の舞台になったことが窺われます。绳文時代後・晚期、乃至弥生時代に始まった遺跡は、古墳時代・奈良・平安時代を経て中世に至るもので、微細に見れば途切れることがあっても、地域全体としては、連続と統一していたことが判明しています。

東木津遺跡、石塚遺跡、下佐野遺跡は、それぞれ以前から著名な遺跡であります。今回の調査地区はいずれも小規模なものであります、ようやく資料を整理し、報告にこぎ着けました。なかには10年あまり以前のものもありますが、発掘調査した遺跡を報告するのは当然の責務であり、小規模なものといえども、確實に報告して行く所存です。

最後になりましたが、調査実施及び報告書作成にご協力頂きました関係各位に厚く御礼申しあげます。

平成9年3月

高岡市教育委員会

教育長 細呂木 六良

## 例　　言

1. 本書は、開発工事に伴い実施した、東木津遺跡、石塚遺跡、下佐野遺跡の発掘調査の概要報告書である。
2. 調査地区は以下の3箇所である。
  - (1) 東木津遺跡、香箱地区  
高岡市木津 1035-6  
昭和 61 年度現地調査
  - (2) 石塚遺跡、正和地区  
高岡市和田 1215-2  
平成 3 年度現地調査
  - (3) 下佐野遺跡、さのクリニック地区  
高岡市佐野 919-3  
平成 5 年度現地調査
3. 現地調査の経費は、東木津遺跡と石塚遺跡は、県単補助事業により実施した。下佐野遺跡は、原因者負担により実施した。
4. 整理・報告書作成作業は、平成 8 年度の市単独事業として実施した。
5. 平成 8 年度の調査関係者は以下のとおりである。  
文化財課長；田村晴彦  
〔埋蔵文化財係〕  
主幹兼係長；石浦正雄  
係員；山口辰一、根津明義、荒井隆
6. 本書における遺構記号は以下のとおりである。  
SK—土坑、SD—溝
7. 本書における遺物番号は以下のとおりである。  
1001 番～東木津遺跡出土遺物  
2001 番～石塚遺跡出土遺物  
3001 番～下佐野遺跡出土上土器類  
4001 番～下佐野遺跡出土勾玉
8. 本書の執筆は山口が担当した。



## 目 次

序	
例言	
目次	
<b>1. 東木津遺跡、香翔地区</b>	<b>1</b>
I 序 説	3
II 遺 物	5
III 結 語	6
<b>2. 石塚遺跡、正和地区</b>	<b>7</b>
I 序 説	9
II 遺 構	11
III 遺 物	15
IV 結 語	16
<b>3. 下佐野遺跡、さのクリニック地区</b>	<b>17</b>
I 序 説	19
II 遺 構	21
III 遺 物	23
IV 結 語	24

## 図面目次

- 図面1 遺物実測図 東木津遺跡 土師器、須恵器  
図面2 遺物実測図 東木津遺跡 須恵器  
図面3 遺物実測図 東木津遺跡 須恵器  
図面4 遺物実測図 石塚遺跡 弥生土器  
図面5 遺物実測図 石塚遺跡 弥生土器  
図面6 遺物実測図 石塚遺跡 弥生土器、土師器  
図面7 遺物実測図 下佐野遺跡 土師器、珠洲  
図面8 遺物実測図 下佐野遺跡 須恵器

## 図版目次

- 図版1 遺構 東木津遺跡 1. 調査風景（南西）  
2. 調査風景（南西）  
3. 調査風景（北東）  
図版2 遺構 石塚遺跡 1. 試掘坑No1全景（南西）  
2. 試掘坑No2全景（南西）  
3. 試掘坑No3全景（北西）  
図版3 遺構 石塚遺跡 1. 試掘坑No4全景（東）  
2. 試掘坑No5近景（南西）  
3. 試掘坑No7全景（北西）  
図版4 遺構 石塚遺跡 1. 試掘坑No6全景（北西）  
2. 試掘坑No7近景（北）  
図版5 遺構 石塚遺跡 1. 試掘坑No7遺物出土状態（南西）  
2. 試掘坑No7遺物出土状態（南）  
図版6 遺構 石塚遺跡 1. 調査風景（南東）  
2. 調査風景（北東）  
3. 調査風景（北西）  
図版7 遺構 下佐野遺跡 1. 全景（北東）  
2. 全景（南東）  
図版8 遺構 下佐野遺跡 1. 土坑S K 40全景（東）  
2. 洪S D 19全景（北西）

- 図版 9 遺構 下佐野遺跡 1. 溝 S D 21 全景（北）  
2. 溝 S D 21 全景（南）
- 図版 10 遺構 下佐野遺跡 1. 溝 S D 21 東側部分全景（北西）  
2. 溝 S D 21 東側部分全景（南西）
- 図版 11 遺構 下佐野遺跡 1. 溝 S D 21 東側部分近景（南）  
2. 溝 S D 21 東側部分近景（南）
- 図版 12 遺構 下佐野遺跡 1. 溝 S D 21 勾玉出土状態（南）  
2. 溝 S D 21 勾玉出土状態（南東）  
3. 溝 S D 21 勾玉出土状態（南）
- 図版 13 遺構 下佐野遺跡 1. 調査風景（南東）  
2. 調査風景（南西）  
3. 調査風景（北西）
- 図版 14 遺物 東木津遺跡 1. 土師器  
2. 須恵器
- 図版 15 遺物 東木津遺跡 1. 須恵器  
2. 須恵器
- 図版 16 遺物 東木津遺跡 1. 須恵器  
2. 須恵器
- 図版 17 遺物 石塚遺跡 弥生土器
- 図版 18 遺物 石塚遺跡 1. 弥生土器  
2. 弥生土器
- 図版 19 遺物 石塚遺跡 1. 弥生土器  
2. 土師器
- 図版 20 遺物 下佐野遺跡 1. 土師器、珠洲  
2. 須恵器
- 図版 21 遺物 下佐野遺跡 勾玉

## 挿 図 目 次

第 1 図 東木津遺跡位置図 (1 / 5 万)	2
第 2 図 東木津遺跡調査地区位置図 (1 / 5,000)	3
第 3 図 東木津遺跡遺構図 (1 / 200)	4
第 4 図 石塚遺跡位置図 (1 / 5 万)	8
第 5 図 石塚遺跡調査地区位置図 (1 / 5,000)	9
第 6 図 石塚遺跡試掘坑位置図 (1 / 600)	11
第 7 図 石塚遺跡遺構図 (1 / 200)	12
第 8 図 石塚遺跡試掘坑土層断面図 (1 / 60)	14
第 9 図 下佐野遺跡位置図 (1 / 5 万)	18
第 10 図 下佐野遺跡調査地区位置図 (1 / 5,000)	19
第 11 図 下佐野遺跡遺構図 (1 / 200)	21
第 12 図 下佐野遺跡勾玉実測図 (実大)	23

### 調査参加者名簿

#### 発掘

福場由美子、大谷知可子、岡島敏雄、小林茂、坂林泰子、杉本広政、杉本光映、高田えみ子、道谷美奈子、中島和美、前田武麗、松井弘子、水外一郎、宮下真知子、横田光弘

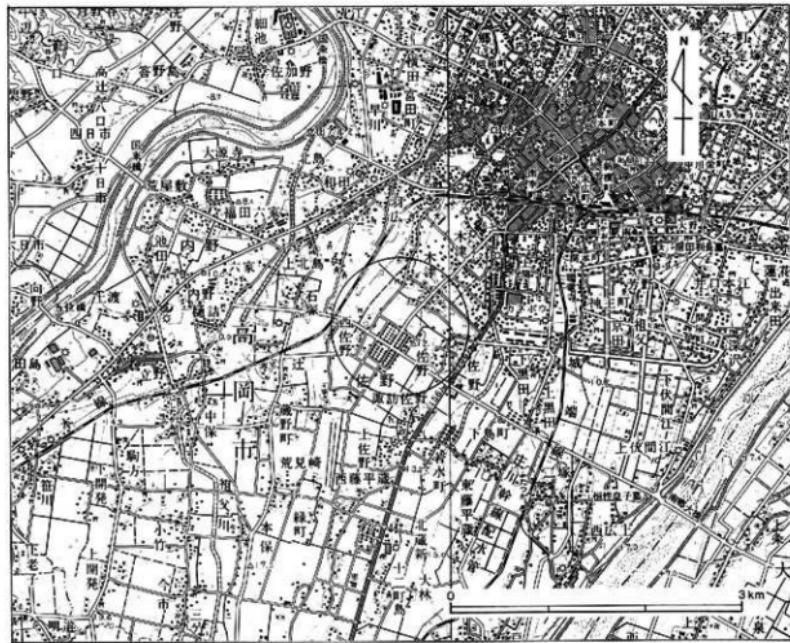
#### 整理

池守千子、上田順子、大田欣和、尾山久美子、星地慶子、小林央、新谷晴紀子、高田えみ子、川辺幸代、寺井久子、上合良子、道谷美奈子、中村恭子、苗田勝江、橋真理子、轟薰、船木悦子、三國世理子

## 1. 東木津遺跡、香翔地区

## 東木津遺跡香翔地区、目次

I 序 説 .....	3
II 遺 物 .....	5
III 結 語 .....	6



第1図 東木津遺跡位置図 (1/5万)

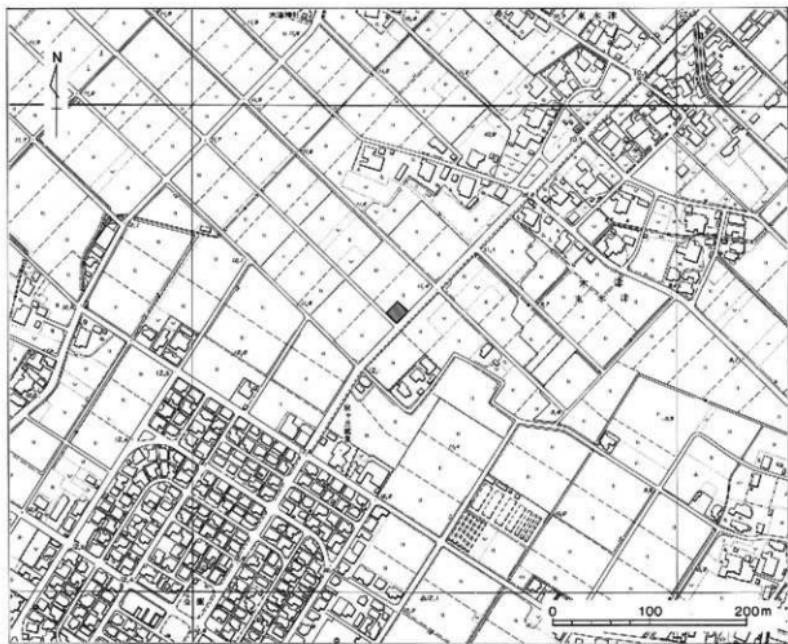
## I 序 説

### 遺跡概観

当「東木津遺跡」は、高岡市街地の南西郊、JR高岡駅の南西約3kmに位置する。泉ヶ丘団地の北側一帯であり、東側約500mには国道156号線が、西側約500mにはJR北陸本線が、北北東～南南西方向に走っている。遺跡は、東側の千保川と西側の和田川に挟まれた標高11～12mの微高地に立地している。この付近は往古の庄川が形成した扇状地の末端部に当たる。

遺跡の範囲は南北250m×東西600mを計り、南側は下佐野遺跡に繋がって行く。また北西側には木津神社遺跡がある他、西木津遺跡、泉ヶ丘遺跡、諏訪遺跡等もあり、これらと共に千保川と和田川の間の微高地に位置する遺跡群を形作っている。

これらの遺跡群は、弥生時代後期に始まり、古墳時代、奈良・平安時代を経て中世に至る遺跡である。東木津遺跡は、これまで、奈良時代～平安時代中頃を中心とする遺跡として、早くから知られていた遺跡である。近年実施した分布調査により、その範囲が広まり、南側は下佐野遺跡と接するものとなり、東西や北側へも拡大した。



第2図 東木津遺跡調査地区位置図 (1/5,000)

### 調査に至る経緯

この調査は、農地転用によるもので、試掘調査をした結果、溝状のものが1条検出されたので、この部分のみ本調査を実施したものである。調査対象面積は264 m<sup>2</sup>である。調査当時の調査関係者は以下の通りである。

社会教育課長；熊木史郎

文化係長；太田健一

係員；大野文郷、山口辰一

### 調査経過

一部盛土がなされていたので、これと表土（耕作土）をバックフォーで除去して試掘調査を実施した。その結果、溝状の遺構が検出されたので、引き続いて本調査に移り、この溝の調査を実施した。調査期間は、試掘調査も含め、昭和62年2月22日から同年3月31日までである。調査は大野文郷が担当した。

### 検出遺構

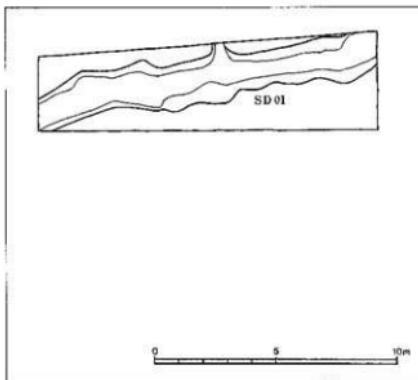
溝が1条検出された。

### 溝SD 01

北北東～南南西に走る溝。規模は幅1.50～2.10m、深さ30cmを計る。14.5mに亘り検出され、北北東側、南南西側とも調査地区外に延びている。

### 出土遺物

土師器、須恵器が出土した。



第3図 東木津遺跡遺構図  
(1/200)

## II 遺 物

出土遺物は土器類のみで、すべて溝 S D 01 から出土したものである。

### 1. 土器器

**椀** 図面 1 - 1001。椀の底部である。底部は糸切りしている。

**甌** 図面 1 - 1002 ~ 1007。甌の口縁部である。1002 は口縁部を上方へつまみ上げている。1003 は外反気味になり丸く終わっている。1004 は口縁部を内側に屈曲してつまみ上げている。1005 ~ 1007 は口縁部を巻き込んでいる。

**鍋** 図面 1 - 1008, 1009。鍋の口縁部である。端部が内傾し、つまみ上げられている。

### 2. 須恵器

**杯 A** 図面 1 - 1010 ~ 1021。高台の付かない杯である。底部はヘラ切りしている。

**杯 B** 図面 2 - 1022 ~ 1046。高台付の杯である。1022 ~ 1039 の高台部は外下方へ踏ん張るものである。これら以外の 1040 ~ 1046 の高台部は下方へ小さく延びるものである。

**杯口縁部** 図面 2 - 1047 ~ 1051。杯の口縁部である。1051 は高台が付く可能性が高いものである。

**杯 B 蓋** 図面 3 - 1052 ~ 1069。杯 B と組み合うとされる蓋である。全体の形態が判明するものは、1052 ~ 1054 の 3 点である。1055 ~ 1061 の 7 点は、つまみ部、天井部の破片で口縁部は欠損している。1062 ~ 1069 の 8 点は、口縁部を中心とする破片である。すべてつまみを有するものと判断される。つまみは宝珠形になるものが多い。口縁部は口縁部を下方へ短く折り曲げるものが多い。調整手法では、天井部のヘラ削りを確認できるものは、1055, 1056, 1058, 1061, 1064, 1068, 1069 である。また 1060 は天井部に自然転が付く。

**鉢** 図面 3 - 1070。鉢の把手の破片としたものである。

**壺** 図面 3 - 1071, 1072。1071 は直口壺の口縁部である。1072 は壺の高台付の底部である。

**甌** 図面 3 - 1073, 1074。1073 はやや小型の甌の口縁部、1074 は大型の甌の口縁部である。1074 には外面に横描き波状文が廻る。

### III 結 語

今回の調査は、当「東木津遺跡」としては、初めての本調査である。検出された遺構は溝1条である。出土遺物も土器類のみである。

東木津遺跡については、今回の調査地区より北側で数箇所試掘調査を実施しているが、土器片が僅かに出土する地区がある程度で、遺構・遺物とも見られない地区もあり、今回の調査地区から北側への広がりはあまりないものと判断している。

一方南側については、下佐野遺跡方面へ広がっており、両遺跡の範囲は明確ではない。むしろ、泉ヶ丘遺跡も含めて、一つの遺跡と把握する方がよいのかもしれない。

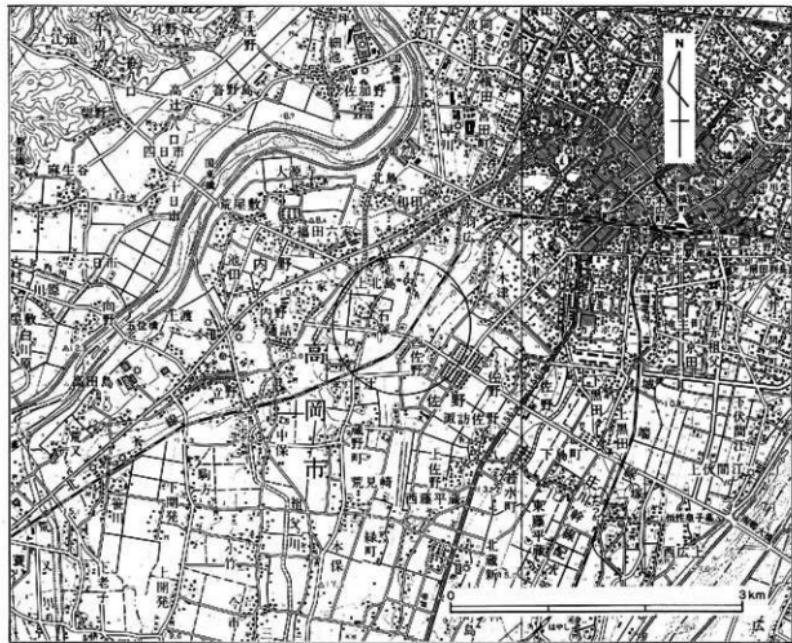
今回の調査の出土遺物は須恵器が主体である。溝からの出土遺物とは言え、時期的には比較的まとまっている資料と考えている。ほぼ8世紀後半頃のものとしてよいであろう。溝の時期も当然この時期のものとしてよいと思われる。

表面採集資料より、東木津遺跡は、奈良時代から平安時代前期を中心の遺跡と把握してきたが、今回の調査により、その一端が判明したと言える。

## 2. 石塚遺跡、正和地区

## 石塚遺跡正和地区、目次

I 序 説 .....	9	III 遺 物 .....	15
II 遺 構 .....	11	IV 結 語 .....	16
1. 試掘坑各説 .....	11		
2. 遺構各説 .....	13		



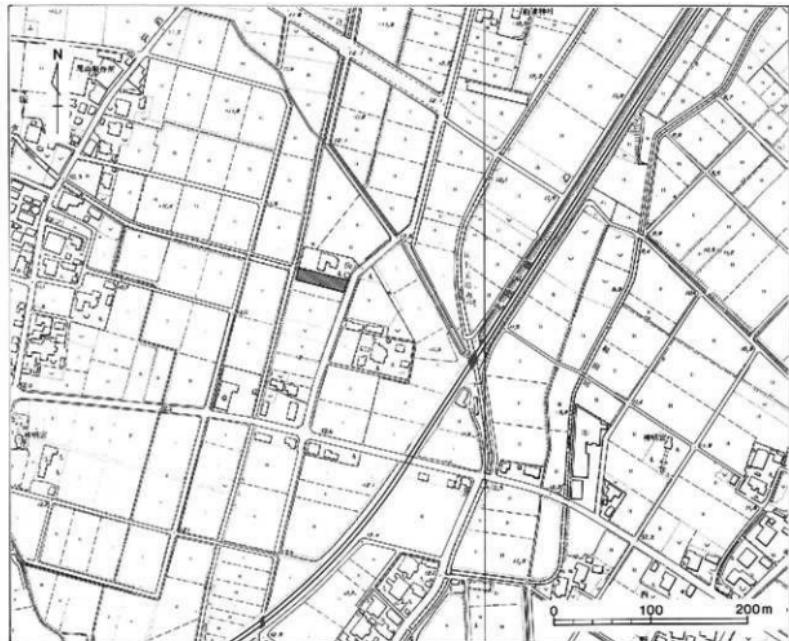
第4図 石塚遺跡位置図 (1／5万)

# I 序 説

## 遺跡概観

当「石塚遺跡」は、高岡市街地の南西郊、JR高岡駅の西南西約3.0kmに位置する。遺跡の東端部をJR北陸本線が走っている。東側には和田川が西側には祖父川がそれぞれ北流している。この両河川に挟まれた標高11～12mの微高地に当遺跡が立地している。この付近は、県西部の大河、庄川が形成した扇状地の末端部に当たる。和田川、祖父川とも、扇状地特有の湧水を水源とする河川である。

遺跡の範囲は、南北600m×東西470mを計り、当地域では最大規模の遺跡である。周囲には縄文時代後・晩期から中世に至る小規模集落が数箇所あり、これらに対する中核的集落であったと言えよう。当遺跡では、最近縄文時代後期後葉の包含層も確認され、縄文時代晚期～弥生時代前期は明確でないものの、これ以降、營々と生活や活動がなされたことが判明してきている。特に弥生時代中期の遺構・遺物は上記の遺跡範囲全てに存在しており、県下西部地域において初期農耕文化が初めて定着した集落跡としての評価がなされている。



第5図 石塚遺跡調査地区位置図 (1/5,000)

### **調査に至る経緯**

平成3年9月、市農業委員会からの照会で、当遺跡における農地転用と資材置場の造成計画を知った。施主の株式会社正和化学の承諾を得て、試掘調査を実施した。遺跡の所在地であることが確実な地区であるが、資材置場のための土盛りのみの工事のため、試掘調査のみ実施することで調査を開始した。

### **調査経過**

発掘調査は、平成3年10月24日～11月6日まで実施した。実働7日間の調査である。掘り下げは人力によるものである。2m四方の試掘坑を設定し、必要に応じてこれを拡張する形にした。結果的には、7つの試掘坑となった。東側のものを試掘坑No.1とし、西側に向かって順次番号を付けた。よって西端部のものはNo.7である。調査対象面積は682m<sup>2</sup>で、62m<sup>2</sup>の発掘をした。なお、調査後約1年で、この資材置場はさらに南側へ拡張されたが、この時は試掘調査を省略した。

調査当時の調査関係者は、以下のとおりである。

社会教育課長：佐野喜朗

文化係長：大石茂

係員：山口辰一

### **基本層序**

基本層序は、厚さ25～30cmの耕作土の下に、第2層—暗褐色粘質土、第3層—黒褐色粘質土、第4層—暗灰褐色粘質土と続く。浅い所では、第2層の下が基盤層の黄灰白色のシルトとなるが、深い所では、第3・4層及び、4層以下の土層も確認された。

### **検出遺構**

検出遺構は次のとおりである。

土坑1基

溝2条

### **出土遺物**

出土遺物は、弥生土器、土師器である。

## II 遺構

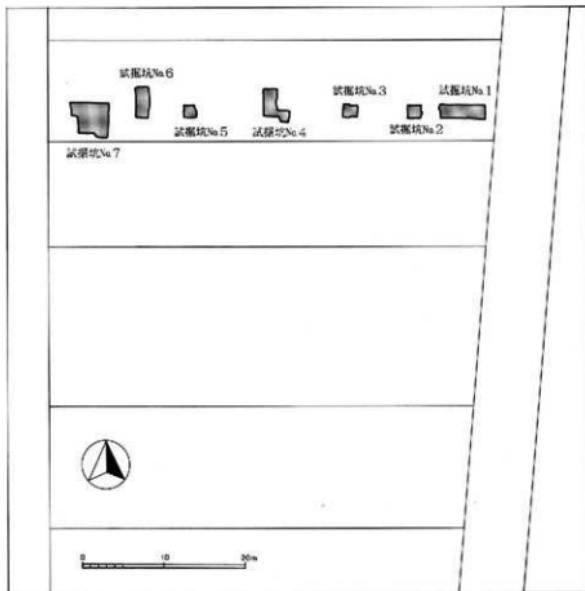
### 1. 試掘坑各説

#### 試掘坑No.1

東端部の試掘坑である。当初  $2\text{m} \times 2\text{m}$  のものとして設定したが、東西に拡張して、南北  $2\text{m} \times$  東西  $6\text{m}$  の試掘坑となった。土層は、第1層；灰褐色粘質土、第2層；暗褐色粘質土、第3層；黒褐色粘質土、第4層；暗灰褐色粘質土、第5層；黄灰白色シルトとなり、第5層が基盤層である。地形的には緩やかに西側へ向かって傾斜している。試掘坑の東側では、第3・4層は堆積していない、第2層の下が基盤層となっていた。中央部より南北に走る溝が検出された。これは第4層の下方から検出されたものである。幅  $2\text{m}$  の試掘坑の内、基盤層までの掘り下げは、北側  $1\text{m}$  幅で行った。第8図で示した土層断面図は、北壁のものである。

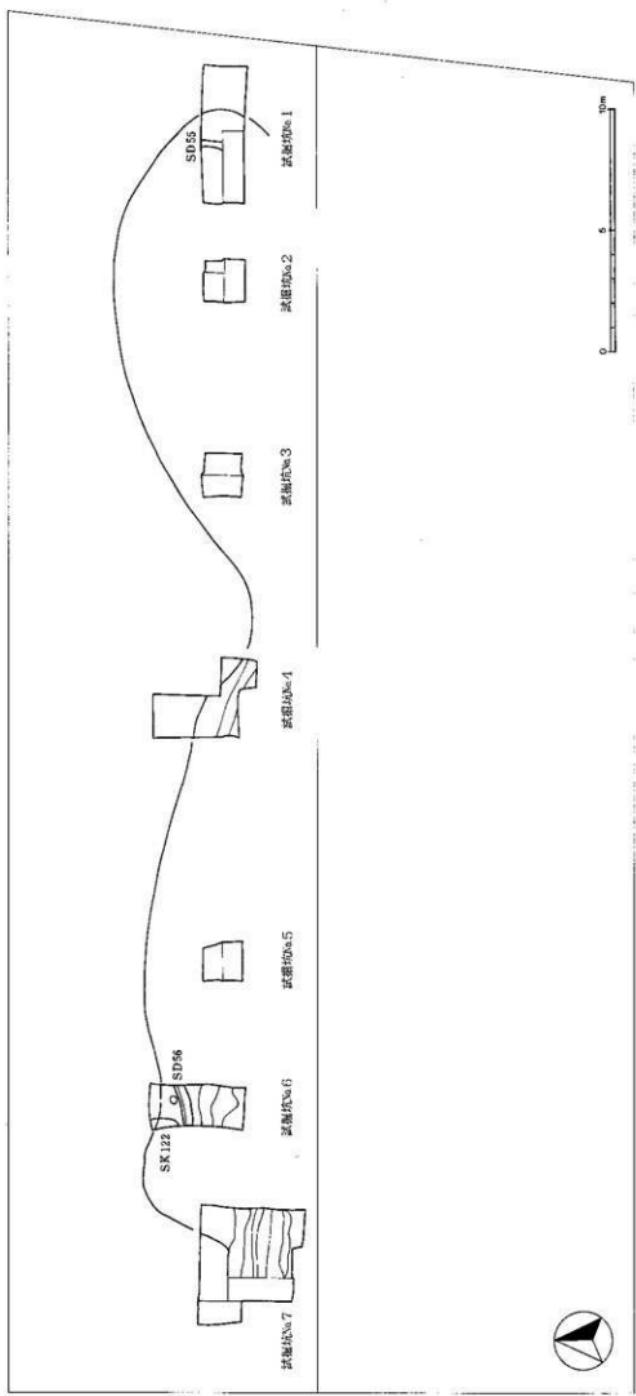
#### 試掘坑No.2

東側から2番目の試掘坑である。試掘坑No.1から  $2\text{m}$  間を置き、西側に設定した  $2\text{m} \times 2\text{m}$  の試掘坑である。基盤層までの深掘りは、北東側でのみ行った。土層は、第1層；灰褐色粘質土、第2層；暗褐色粘質土、第3層；黒褐色粘質土、第4層；泥炭層、第5層；灰色砂で樹木混じり、第6層；礫層で砂混じりとなり、



第6図 石塚遺跡  
試掘坑位置図  
(1/600)

第7図 石塁道路構造図(1/200)



第6層が基盤層である。地表面より、基盤層の上面までは、127cmを計る。

#### 試掘坑No.3

試掘坑No.2よりさらに6m西側に設定した試掘坑で、2m×2mの規模である。基盤層までの深掘りは、東側でのみ行った。土層は、第1層；灰褐色粘質土、第2層；暗褐色粘質土、第3層；黑褐色粘質土、第4層；泥炭層、第5層；灰色粘土上に水性植物混じり、第6層；砂層となり、第6層が基盤層である。地表面より、基盤層の上面までは、199cmを計る。

#### 試掘坑No.4

試掘坑No.3より8m西側に設定した試掘坑である。当初2m×2mのものとして設定したが、北側と南東側に拡張したため、変則的な形となった。この試掘では地形が南南西側に傾斜している状況が確認された。土層は、第1層；灰褐色粘質土、第2層；暗褐色粘質土、第3層；黑褐色粘質土、第4層；暗褐色粘質土、第5層；黄灰色シルトとなり、第5層が基盤層である。南側の一一番深い所での基盤層までの深さは、124cmを計り、さらに深くなつて行く状況が確認された。第8図に示した土層断面図は、西壁のものである。

#### 試掘坑No.5

試掘坑No.4より8m西側に設定した試掘坑で、2m×2mの規模である。基盤層までの深掘りは、北側でのみ行った。土層は、第1～第4層までは、試掘坑No.1や4とはほぼ同様であるが、その下にいくつかの土層の堆積がみられ、134cmで基盤層に達していた。第8図に示した土層断面図は、北壁のものである。

#### 試掘坑No.6

試掘坑No.5より2m西側に設定した試掘坑で、北側へ拡張して、南北4m×東西2mの試掘坑となった。この試掘では地形が南側に傾斜している状況が確認された。また東西に走る溝や土坑の一部が確認された。土層は、第1～3層までは、他の試掘坑と同様である。その下に樹木の堆積層があり、さらに下方には、幾つかの土層が堆積していた。地表面より、一番深い所での基盤層上面までは、134cmを計り、さらに深くなつて行く状況が確認された。第8図に示した土層断面図は、東壁と西壁のものである。

#### 試掘坑No.7

試掘坑No.6より3m西側に設定した試掘坑で、拡張したため、4m×4mのものに張出部分をもつ形の試掘坑となった。この試掘坑では地形が南側に傾斜している状況が確認された。上層は、第1～3層までは、他の試掘坑と同様である。その下に幾つかの土層が堆積している状況が確認された。地表面より、一番深い所での基盤層上面までは、140cmを計る。第8図に示した土層断面図は東壁のものである。

## 2. 遺構各説

### 土坑SK 122

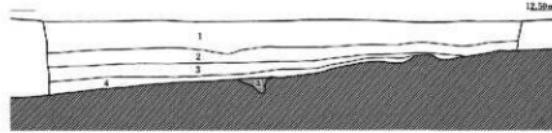
試掘坑No.6で検出されたもので、一部のみ検出した。規模等は不明である。

### 溝SD 55

試掘坑No.1で検出された南北の溝である。幅30～36cm、深さ20cmである。

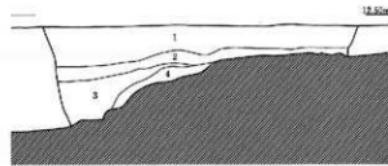
### 溝SD 56

試掘坑No.6で検出された東西の溝である。幅44～46cm、深さ22cmである。

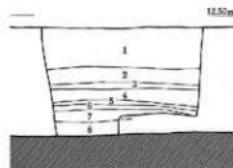


試堀坑No. 1

1. 灰褐色粘質土。
2. 暗褐色粘質土。
3. 黑褐色粘質土。
4. 暗灰褐色粘質土。
- a. 清；黑灰色粘質土、黃灰色  
シルト混り。

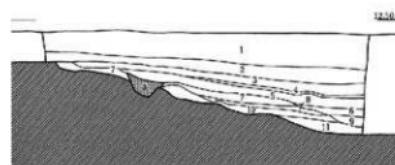


試堀坑No. 4 1. 灰褐色粘質土。 3. 黑褐色粘質土。  
2. 暗褐色粘質土。 4. 暗灰褐色粘質土。



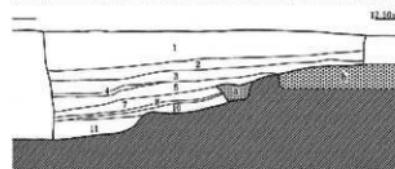
試堀坑No. 5

1. 灰褐色粘質土。
2. 暗褐色粘質土。
3. 黑褐色粘質土。
4. 暗灰褐色粘質土。
5. 灰褐色粘質土、灰色砂混り。
6. 黑褐色粘質土。
7. 明灰色砂。
8. 青灰色砂。



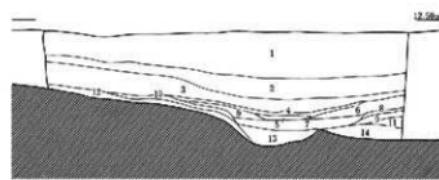
試堀坑No. 6

1. 灰褐色粘質土。
2. 暗褐色粘質土。
3. 黑褐色粘質土。
4. 茶木。
5. 暗灰褐色粘質土。
6. 黑色砂。
7. 暗灰色粘質土。
8. 黄白色粘土。
9. 青灰色粘土。
10. 明灰色粘土。
11. 黑色砂。
- a. 清；黑褐色粘質土。
- b. 土坑；灰色粘質土。



試堀坑No. 7

1. 灰褐色粘質土。
2. 暗褐色粘質土。
3. 黑褐色粘質土。
4. 黑色粘質土。
5. 暗灰色砂。
6. 暗灰褐色粘質土。
7. 暗灰色粘質土、炭化  
物混り。
8. 灰褐色粘質土、灰  
色砂混り。
9. 黑褐色粘質土。
10. 暗黃白色粘土。
11. 明灰色砂。
12. 明灰色粘質土。
13. 暗青灰色砂。
14. 青灰色砂、茶木混り。



0 1 2m

第8図 石塙遺跡試掘坑土層断面図 (1 / 60)

### III 遺 物

出土遺物は十器類のみで、赤牛土器と土師器である。

図示した遺物の出土位置は以下の通りである。

試掘坑No 1 - 弥生土器（図面 4 - 2001）、土師器（図面 6 - 2036, 2037）

試掘坑No 6 - 弥生土器（図面 4 - 2003, 2004, 2006, 2009、図面 5 - 2015、図面 6 - 2025, 2027, 2029）

試掘坑No 7 - 弥生土器（図面 4 - 2002, 2005, 2007、図面 5 - 2011 ~ 2014, 2016 ~ 2018、図面 6 - 2019 ~ 2024, 2026, 2028, 2030, 2032 ~ 2034）

土師器（図面 6 - 2035, 2039 ~ 2041）

#### 1. 弥生土器

**壺A** 図面 4 - 2001。小口の壺で、口縁部は短く外上方へ拡がる。

**壺B** 図面 4 - 2002 ~ 2004。口縁部が外上方へ拡がるものである。2002は口縁、頸、肩部片である。頸肩部に付く櫛描文は、上より、直線文 3 条、波状文 1 条、直線文 2 条、波状文 1 条、直線文 3 条、肩形文 1 条となる。また口縁部内面と口唇部下方にも櫛描列点文が付く。2003と2004は口縁部片であるが、口唇部に櫛描列点文が付く。

**壺C** 図面 4 - 2005 ~ 2009。口縁部が外上方へ開くものである。口端部や口唇部には、櫛描文が付いている。

**壺頸部** 図面 4 - 2010。壺の頸部である。

**壺底部** 図面 5 - 2011 ~ 2013。壺の底部である。

**壺A** 図面 5 - 2014。器壁が薄い壺である。口縁部は強く屈曲して外方へ開く。肩部の張りは少ない。

**壺B** 図面 5 - 2015 ~ 2017。壺の口縁部で、外上方へ拡がるものである。口端部には櫛描文が付く。2016と2017には、頸部に櫛描直線文が付く。

**壺頸胴部** 図面 5 - 2018。壺の頸胴部である。櫛描文が付き、上より、直線文 4 条、波状文 1 条、直線文 1 条、肩形文 1 条となる。口縁部の口径が 18cm 以上となる大型の壺である。また口縁部は胴部最大径より大きくなるものである。

**壺底部** 図面 6 - 2019 ~ 2034。壺の底部である。2023 の底面には、木葉の痕跡が付いている。

#### 2. 土師器

**高杯** 図面 6 - 2035。高杯の柱状部である。外面はヘラ磨きされている。

**壺A** 図面 6 - 2036。複合口縁の壺の口縁部である。口縁部は外面に棱をなして外上方へ拡がる。磨滅しているため、調整手法等は不明である。

**壺B** 図面 6 - 2037。直口の壺の口縁部である。口縁部は外反して外上方へ拡がる。

**壺底部** 図面 6 - 2038。壺の平底の底部である。底部中央はやや窪む。

**壺** 図面 6 - 2039, 2040。壺の口縁部である。口縁部はくの字状に折れて、外反気味に外上方へ拡がる。

**壺底部** 図面 6 - 2041。壺の底部である。丸底気味の底部である。

## IV 結語

当「石塚遺跡」については、昭和42年に発見されて以来、高岡市内の遺跡としては、比較的多くの調査が実施されており、実体が徐々に判明してきている遺跡である。

この調査の実施に当たっては、周囲の調査実例を参考として、比較的浅い所で基盤層に達するものと推定し、予算の都合等もあり、人力による坪振りの形で開始した。しかし、予想した通り単純な状況とはならず、効率が悪い拡張を余儀無くされた。

今回の調査地区は、崖地ないし谷部に該当するところであることが判明した。この付近は幾つかの土坑や溝が存在する地区と言える。遺構としては、土坑1基と溝2条を検出した。

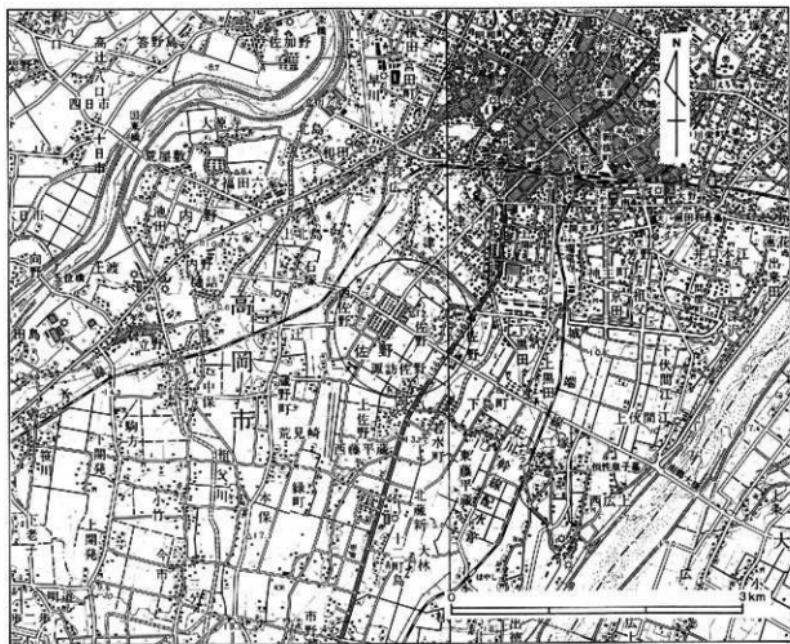
出土遺物は上器類のみで、弥生土器と土師器である。弥生上器については、弥生時代中期のもので、石塚遺跡で通常見られるものである。土師器については出土量は弥生土器ほど多いものではない。石塚遺跡出土の土師器については、奈良時代以降のものは一先ず置くとして、古墳時代のものについては、いままでも出土している。一定量出土するものとしては、古墳時代前期から中期のものであり、今回のものもこの時代のものである。古墳時代後期については明確ではないが、周囲の遺跡の、石塚江之戸遺跡や石名瀬A遺跡からは出土しており、当遺跡から今後出土する可能性がある。

石塚遺跡の主要時代は弥生時代中期であるが、現在の景観とは違い、谷部や崖地が入り組んだ、変化に富んだものであったことが、この調査からも窺うことができる。

### 3. 下佐野遺跡、さのクリニック地区

## 下佐野遺跡さのクリニック地区、目次

I	序 説	19	III	遺 物	23	
			1. 土器類			23
II	遺 構	21	2. 石製品			23
			IV 結 語			24
			1. 土坑			21
			2. 清			22



第9図 下佐野遺跡位置図 (1 / 5万)

## I 序 説

### 遺跡概観

当「下佐野遺跡」は、高岡市街地の南西郊、JR高岡駅の南西約2.5kmに位置する。当遺跡の立地するところは、高岡市の東側を北流して富山湾に注いでいる庄川が形成した扇状地の前面に当たり、東側の千保川と西側の和田川に挟まれた標高11~12mの微高地である。

遺跡の範囲は、南北650m×東西450mと広大なものである。当遺跡の西側には、縄文時代晚期と古墳時代後期~平安時代の遺跡である泉ヶ丘遺跡が所在し、北西方には、奈良・平安時代を中心とする遺跡である東木津遺跡が拡がっている。また、南側にも、奈良・平安時代を中心とする遺跡である諏訪遺跡が位置している。

当遺跡は、昭和38年にその存在が確認された。翌年の昭和39年には、区画整理事業が実施され、その時に多量の遺物が出土した。その後昭和42年に、上野章氏により出土遺物を中心に当遺跡の紹介が行われ、広くその存在が知られることになった。



第10図 下佐野遺跡調査地区位置図 (1/5,000)

## 調査に至る経緯

当該地の開発計画については、仲介の関口不動産（関口順三氏）から照会を受け、開発側と連絡調整を行って発掘調査実施に至った。開発計画は、農地転用し個人医院を建設するものであった。当該地の道路を隔てた北側でも、同じく関口不動産の仲介による開発工事に伴う調査を実施していた。平成2年度に発掘調査した「明光電気地区」である。そこで、試掘調査の結果、本調査実施の可能性が高い地区であることを説明し、試掘調査実施に至った。

試掘調査は、平成5年10月5日～7日までの3日間実施した。対象面積は825m<sup>2</sup>で、2m四方の試掘坑を6箇所設定したので、発掘面積は24m<sup>2</sup>である。掘り下げは人力によるものである。試掘調査の結果、対象地の南側を中心に、土坑や溝が検出された。この結果本調査を実施することになった。

## 調査経過

開発予定地は、西側の医院本体建設部分と、東側の借地による駐車場建設部分とからなるものであった。

東側部分を除外し、また、遺構の検出状況や医院本体の建設場所等も考慮して、本調査地区は、医院本体建設部分の南側を中心に設定し、298m<sup>2</sup>の発掘を実施した。期間は平成5年11月15日～12月15日までの実働15日間である。本調査実施の経費は、施工の川口正一氏に負担して頂いた。調査実施については、関口順三氏、設計・施工管理の墨環境計画事務所の坂野裕毅氏から種々、御配慮いただいた。なお、調査時の調査関係者は、以下のとおりである。

社会教育課長：野村一郎

課長補佐：鹿島誠一

文化係長：大石茂

係員：山口辰一、樋木和代

## 基本層序

当地区は圃場整備事業等による削平を受けており、約20cmの耕作土の下は、直ちに基盤層の粘土層となるものであった。

## 検出遺構

検出遺構は以下のとおりである。

土坑1基

溝3条

## 出土遺物

出土遺物は上器類と石製品である。

土器類：上師器、須恵器、珠洲

石製品：ヒスイ勾玉

## グリッド

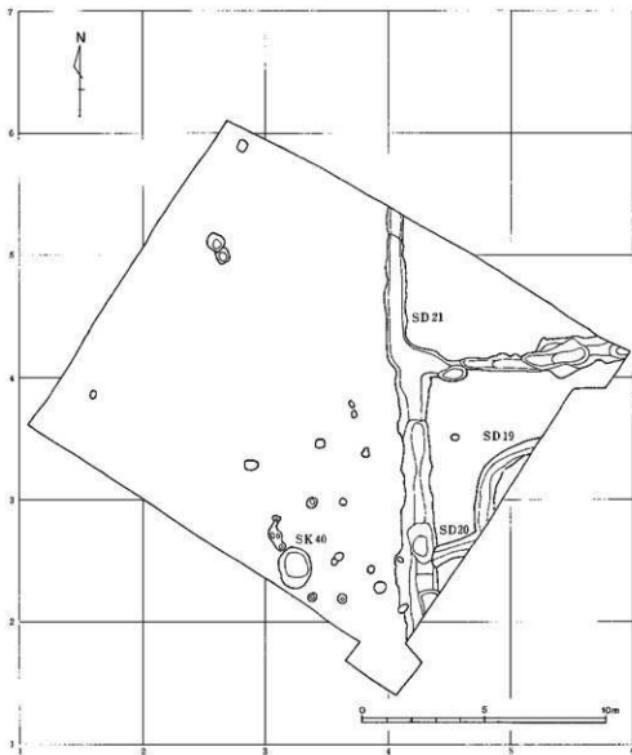
調査地区的グリッドは平面直角座標系（原点は、北緯36° 00' 00"、東経137° 10' 00"）に合わせた。X=1、Y=1の地点は、原点より、西へ15.360km、北へ80.320kmの位置である。遺構図のメッシュは5mの区画である。

## II 遺構

### 1. 土坑

#### 土坑SK 40

調査地区の南端部(3, 2)区で検出された。平面形は楕円形を呈し、規模は、長軸1.75m、短軸1.30m、深さ12cmを有する。中央部を搅乱に切られている。出土遺物はない。



第11図 下佐野遺跡遺構図 (1/200)

## 2. 溝

### 溝 S D 19

調査地区の南東側で検出された湾曲する溝である。規模は、幅44～80cm、深さ16cmを計る。溝の両端部とも調査地区外へ延びている。出土遺物は、土師器である。

### 溝 S D 20

調査地区の南側で検出された東西に走る溝である。規模は、幅68～80cm、深さ12cmを計る。1.60mに亘り検出された。東側は調査地区外となる。西側は、S D 21と重複し、この溝の中で終わっているようである。土層の観察により、この溝がS D 21より新しいものと判断した。出土遺物は、土師器である。図示した遺物は、図面7-3007である。

### 溝 S D 21

調査地区の東側一帯にT字形に括がっている溝である。調査地区の中央東寄りを南北に延びる溝に、東西に延びる溝が取り付く形となっている。南北に16.80m、東西に9.90m検出され、北側、南側、東側の調査地区外へと延びている。深さは、深い所では40cmを計るが、大部分は5～15cmの浅いものとなっている。南側でS D 20と重複している。この溝が古いものと判断した。この溝の東西部分においては、覆土の中から川原石が多数出土した。またこの間に遺物も混ざっていた。出土遺物は、土師器、須恵器、珠洲、勾玉である。図示した遺物は、図面7-3001～3006・3008～3010・3032～3038、図面8-3011～3025・3027～3030、第12図-4001である。

### III 遺 物

#### 1. 土器類

##### 1. 土師器

皿 図面7-3001~3006。小型の皿である。非クロコの製品である。内面と口縁部外面は横ナデしている。

鉢 図面7-3007。一応鉢としたが、形態が不明である。口端部は上方へつまみ上げている。

壺 図面7-3008~3010。壺の口縁部である。3008と3009の口端部は外面に棱が付き、上方へつまみ上げたような形態となっている。3010の口端部は巻き込んだように丸く肥厚する。

##### 2. 須恵器

杯A 図面8-3011~3013。高台の付かない杯である。底部はヘラ切りしている。

杯B 図面8-3014~3016。高台付の杯である。3014の底部はヘラ削りされている。

杯口縁部 図面8-3017~3019。杯の口縁部である。

杯B蓋 図面8-3020~3023。杯Bと組み合うとされる蓋である。口端部の形態は、3020と3021とが、下方へ短く折れ曲がるのに対して、3022と3023は屈曲して丸く肥厚する。

皿 図面8-3024。口径がやや大きく、浅い器形であるので皿としたものである。

鉢 図面8-3025。小型の鉢としたものである。

壺 図面8-3026~3028。3026は広口の壺である。3027は口縁部のみであるが、短頸壺とした。3028は胴底部である。底部外面はヘラ削りしている。

甕 図面8-3029~3031。甕の口縁部である。3029の外側には波状文が付く。

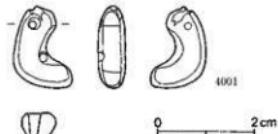
##### 3. 珠洲

鉢 図面7-3032~3035。擂鉢である。オロシ目が確認できるのは3032のみである。いずれも口縁部は欠損している。

壺 図面7-3036~3038。3036は口縁部が外反して外上方へ拡がる。肩部は張らず、弧状の文様が付く。3037は壺の肩部の小破片である。波状文が確認できる。3038は短い口頭部の壺である。

#### 2. 石製品

勾玉 第12図-4001。ヒスイの勾玉である。くの字状に屈曲している。頭部の一部が欠損している。円孔は2箇所付いているが、屈曲部内側のものは貫通していない。頭部のものは貫通している。



第12図 下佐野遺跡勾玉実測図（実大）

## IV 結 語

当「下佐野遺跡」については、弥生時代末期の遺跡として知られてきた。この時期以外にも、奈良・平安時代の遺物も多く出土し、中世の遺構や遺物も確認されてきたところである。

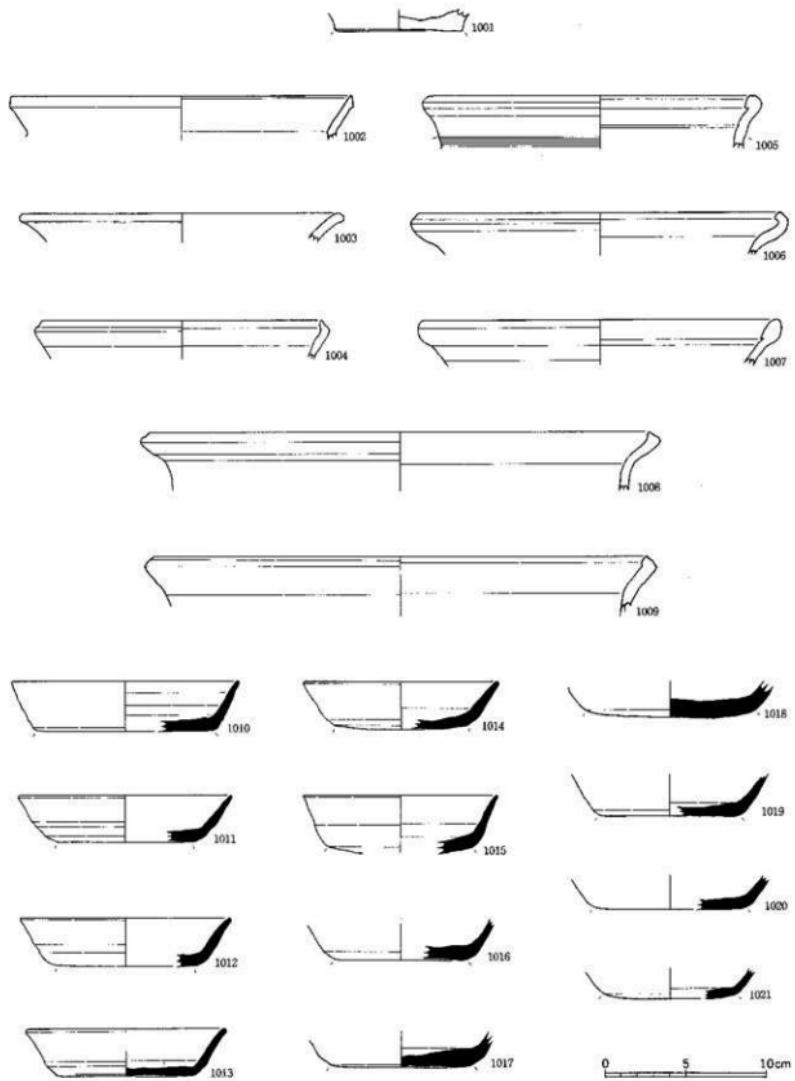
今回の調査では、土坑と溝が検出された。出土遺物は、勾玉1点以外は土器類のみである。土器類は、奈良・平安時代のものと中世のものとに大きく2区分される。

今回の調査地区は、上部削平を受け、遺構は本来のものと比べて、相当浅くなっているものと推定されるものである。

今回の調査地区の北側の調査地区では、中世の遺構が検出され、遺物が出土している。この時も奈良・平安時代の遺物も出土したが、遺構に伴うものとは判断しなかった。今回の溝等の遺構も同様なものと考えたい。出土量からは、中世のものより、奈良・平安時代のものの出土量が多いが、中世の遺物が、遺構に所属し、遺構の時期を示しているものとしたい。

勾玉については、今回の調査地区的西方に弥生時代末期の遺跡が広がっており、この時代乃至これに近い時代のものと考えている。

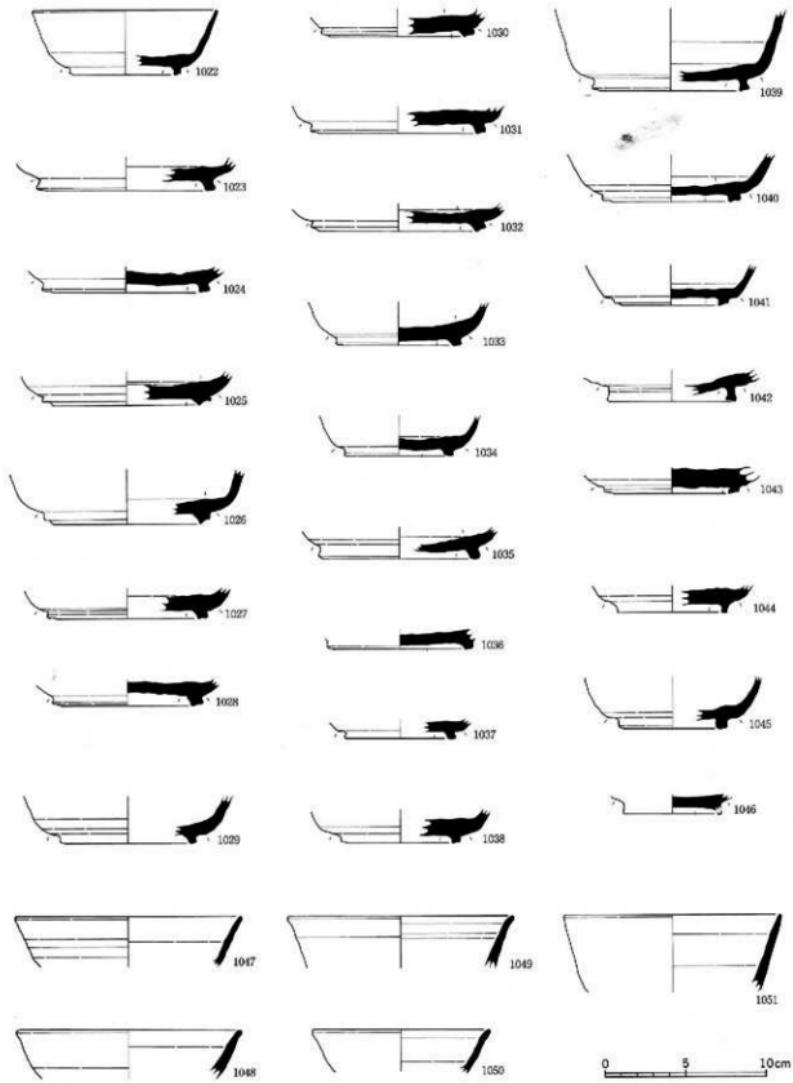
図面・図版

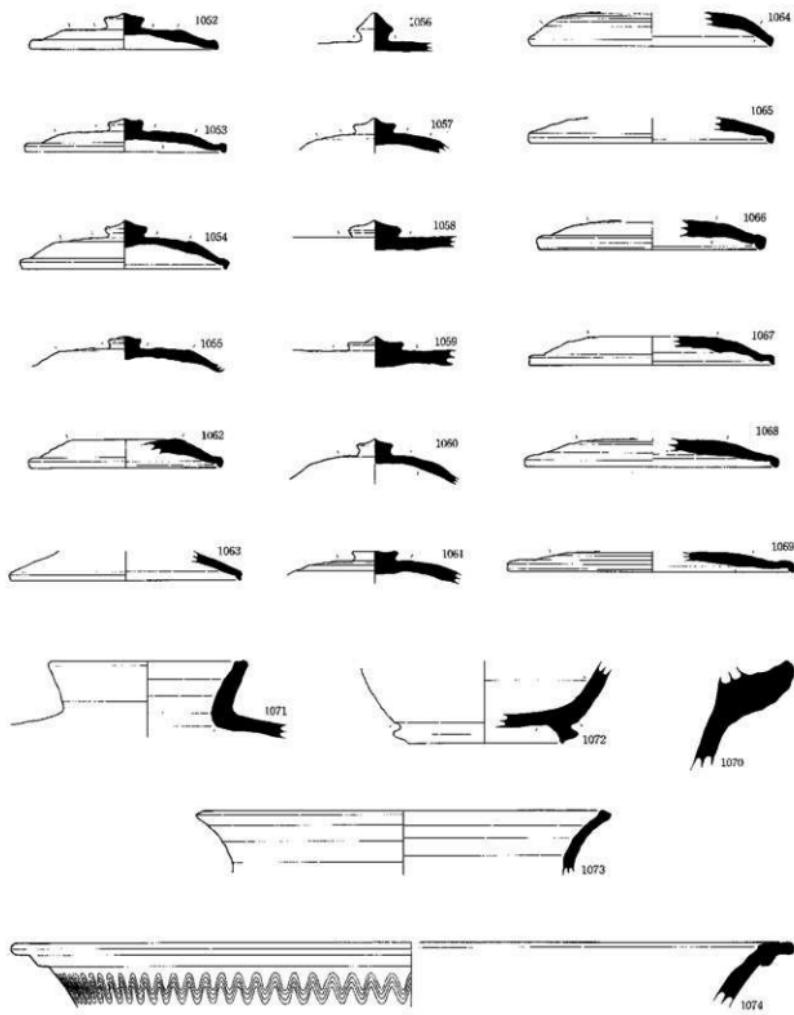


土師器：1001～1009、須恵器：1010～1021

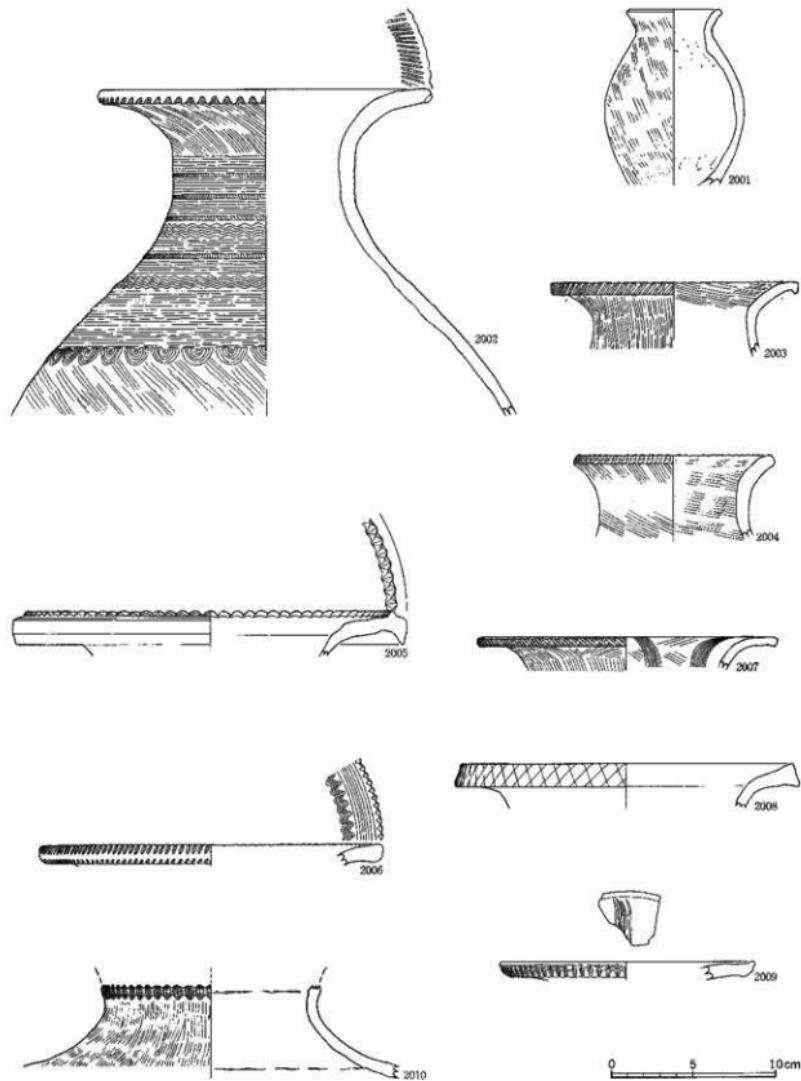
縮尺 1 / 3

図面二 遺物実測図 東木津遺跡

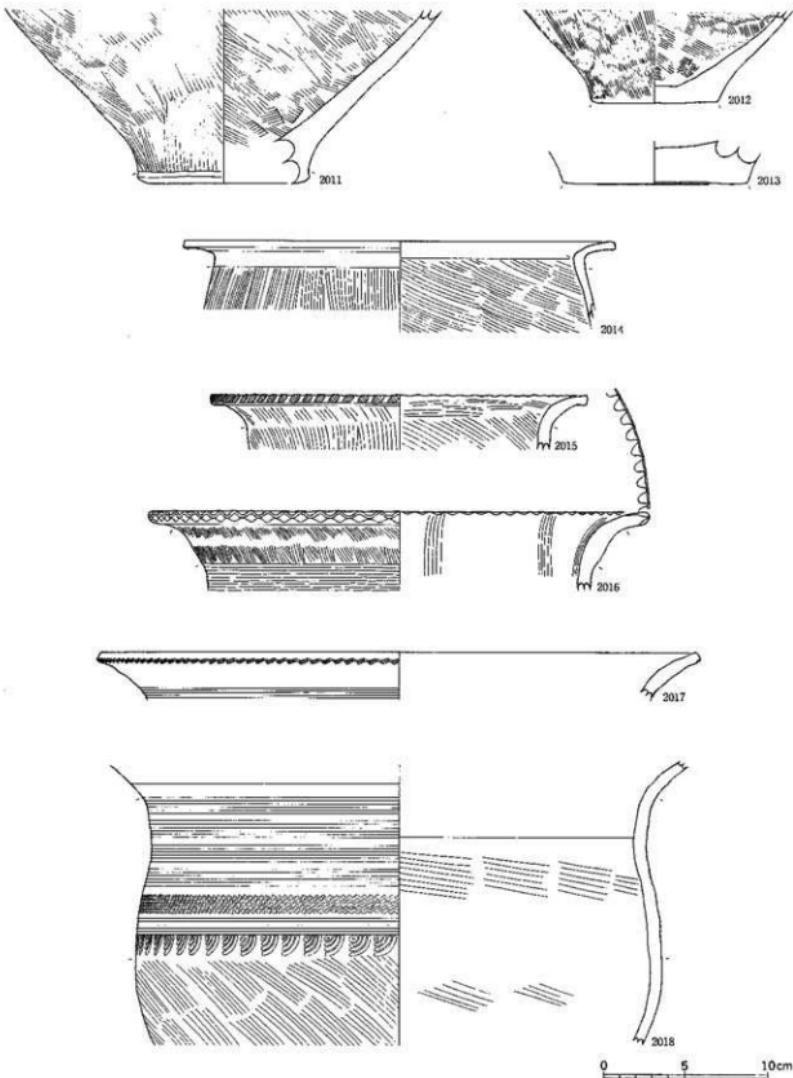


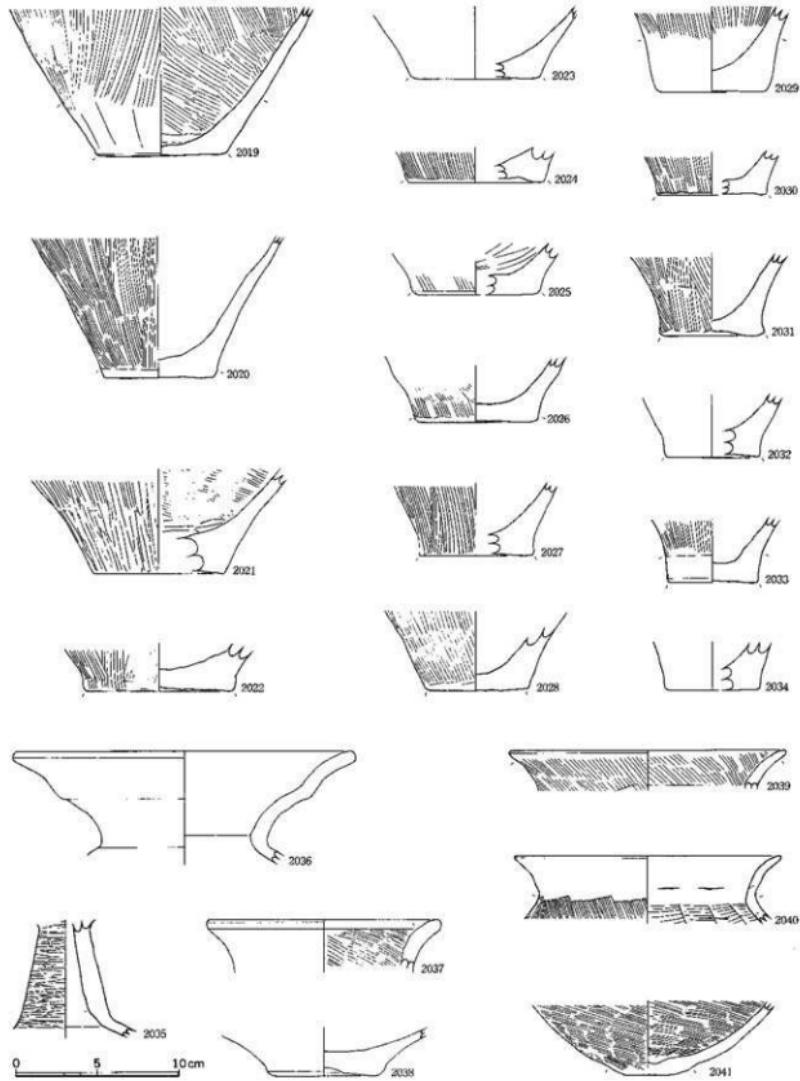


0 5 10cm



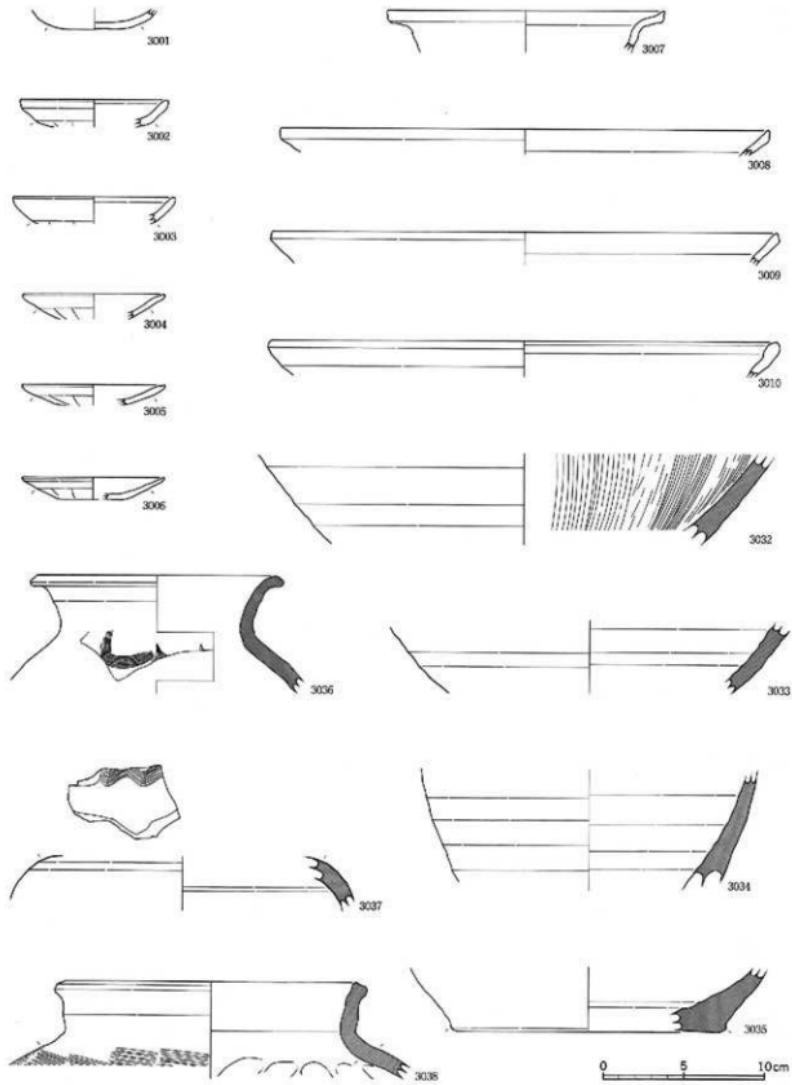
図面五 遺物実測図 石塚遺跡





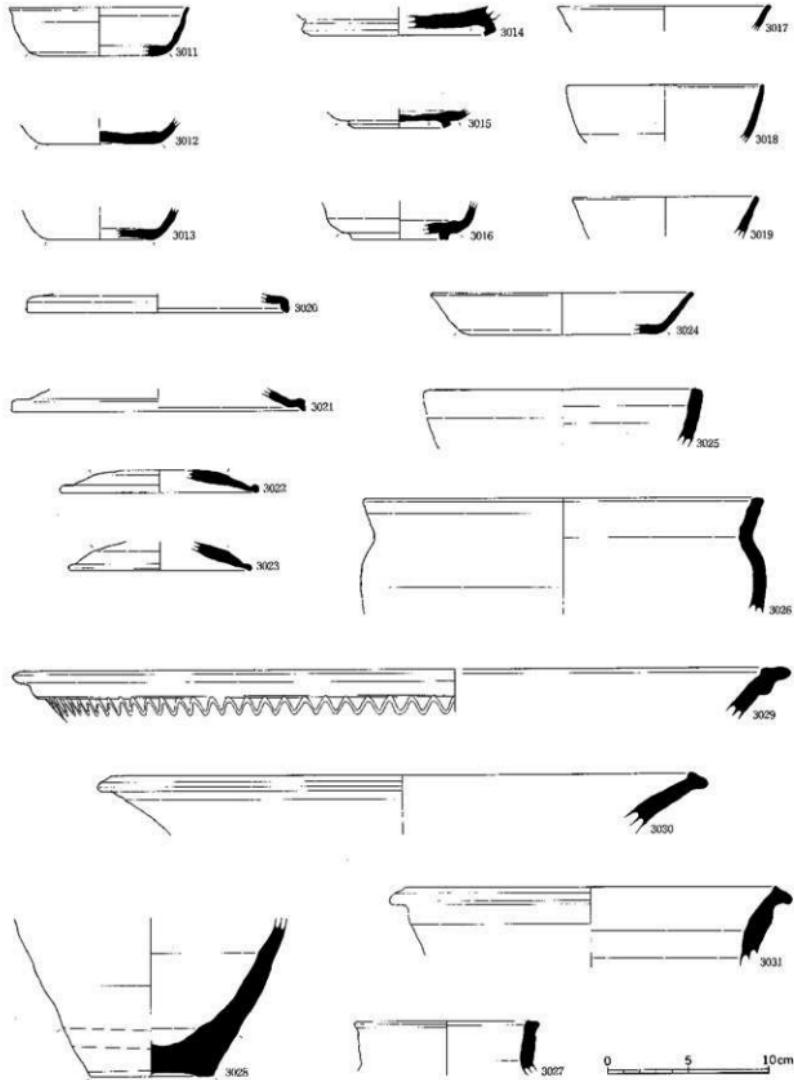
弥生土器；2019～2034、土師器；2035～2041

縮尺 1/3



上部器；3001～3010、糸洲；3032～3038

縮尺 1 / 3





1. 調査風景（南西）



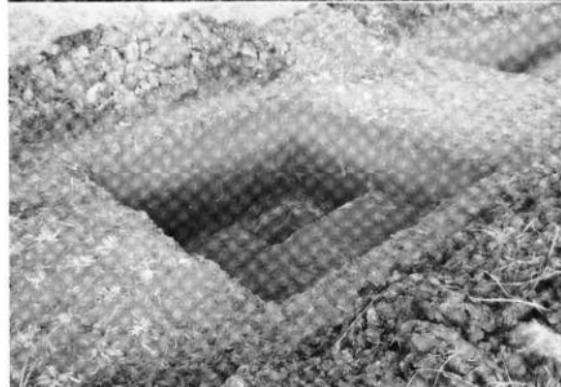
2. 調査風景（南西）



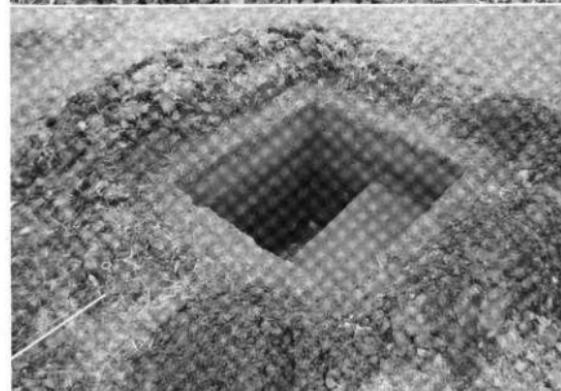
3. 調査風景（北東）



1. 試掘坑No.1 全景（南西）

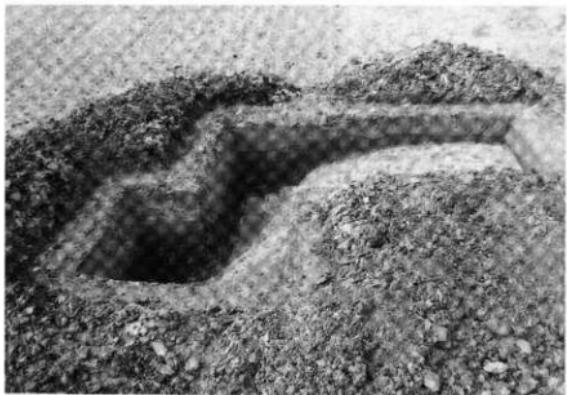


2. 試掘坑No.2 全景（南西）

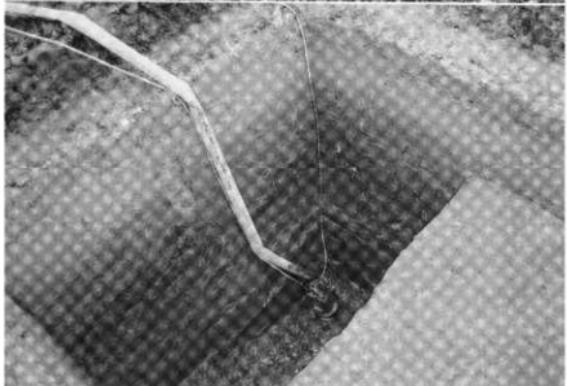


3. 試掘坑No.3 全景（北西）

図版三 造構 石塚遺跡



1. 試掘坑No 4 全景（東）



2. 試掘坑No 5 近景（南西）



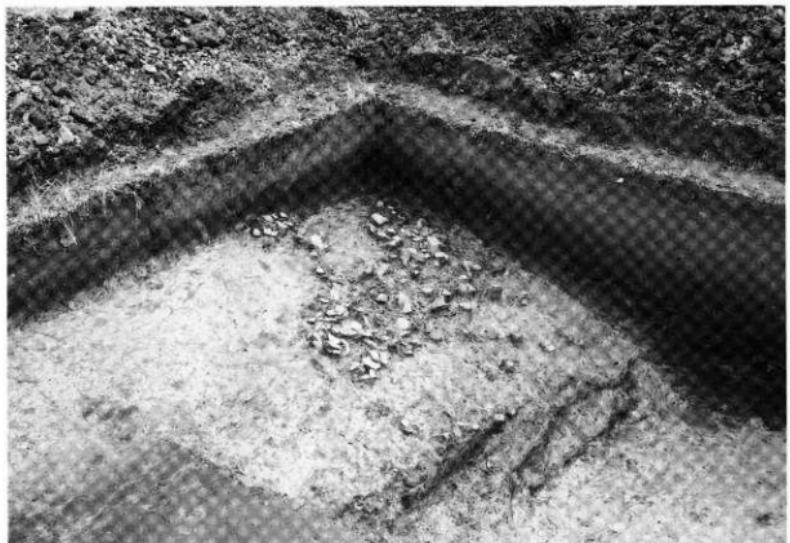
3. 試掘坑No 7 全景（北西）



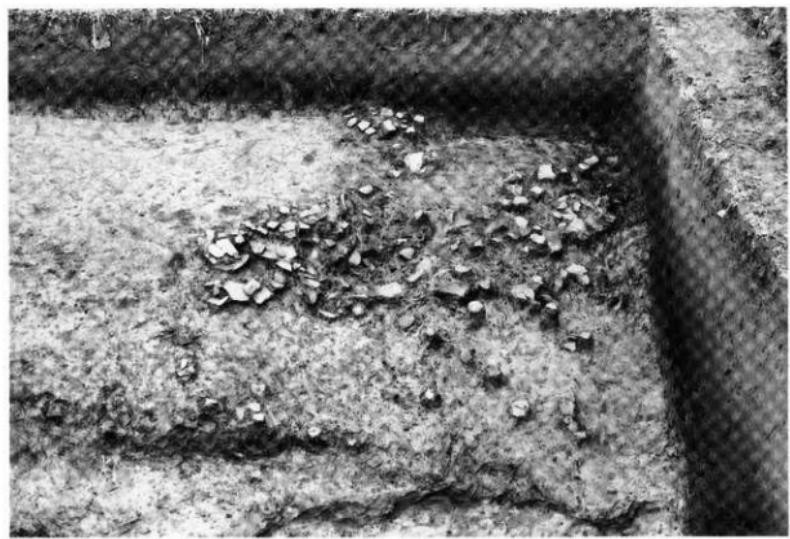
1. 試掘坑No.6 全景（北西）



2. 試掘坑No.7 近景（北）



1. 試掘坑No.7 遺物出土状態（南西）



2. 試掘坑No.7 遺物出土状態（南）



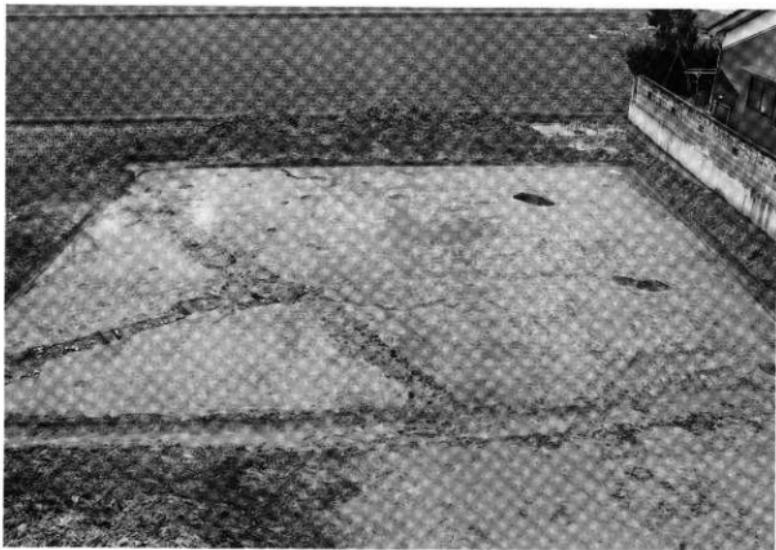
1. 調査風景（南東）



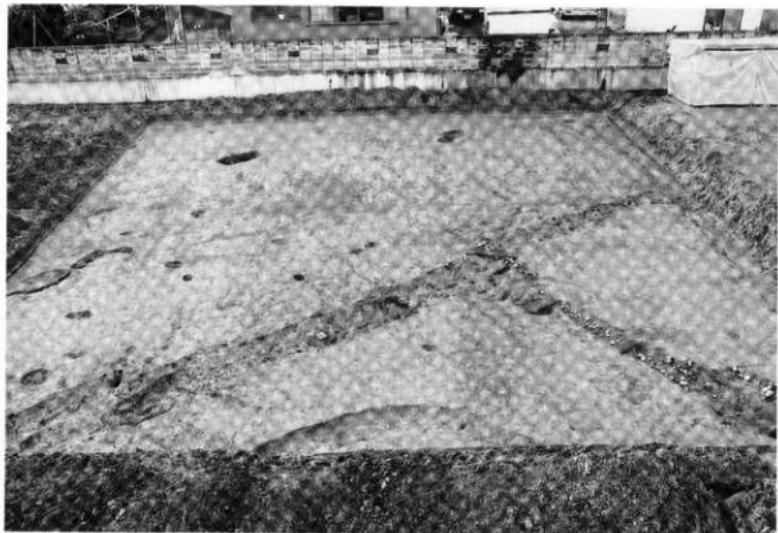
2. 調査風景（北東）



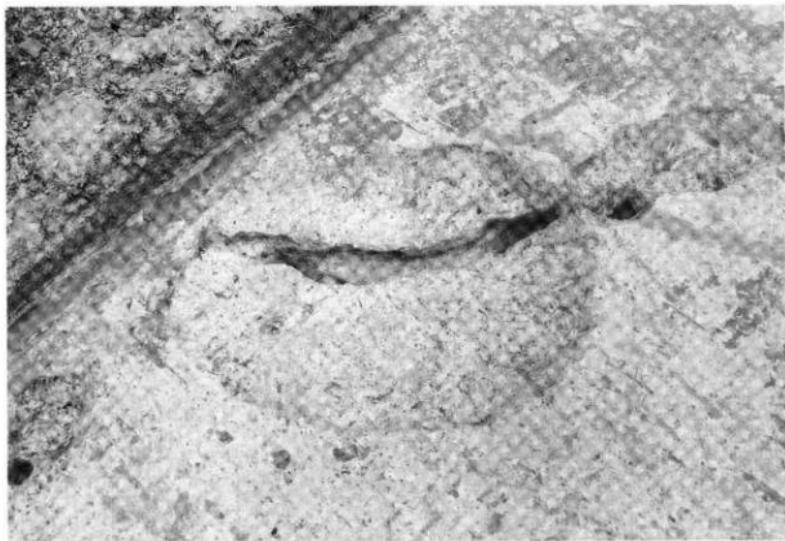
3. 調査風景（北西）



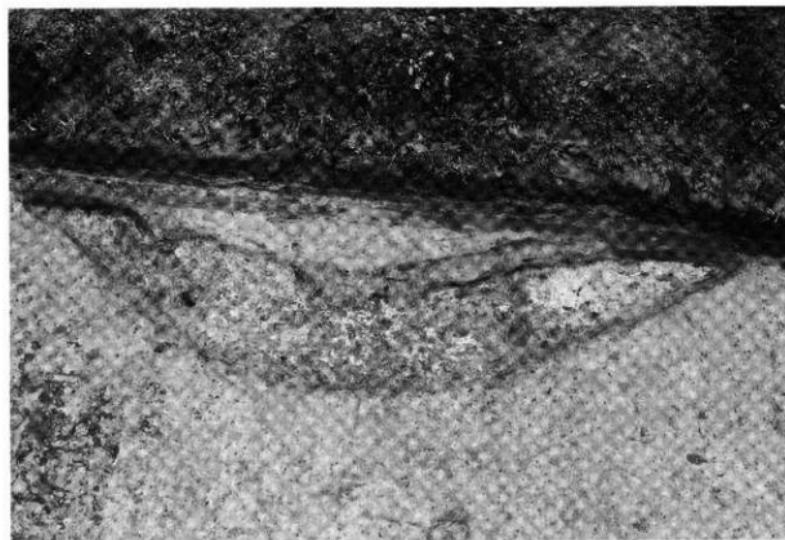
1. 全景（北東）



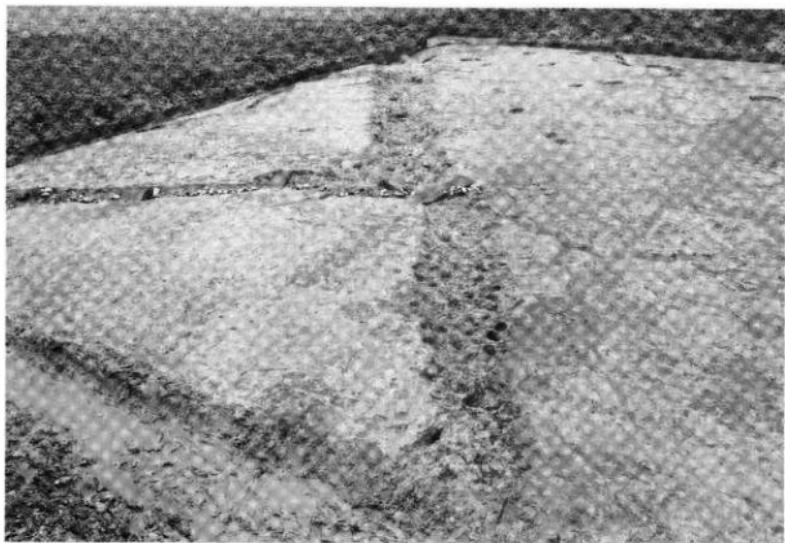
2. 全景（南東）



1. 土坑SK 40全景(東)



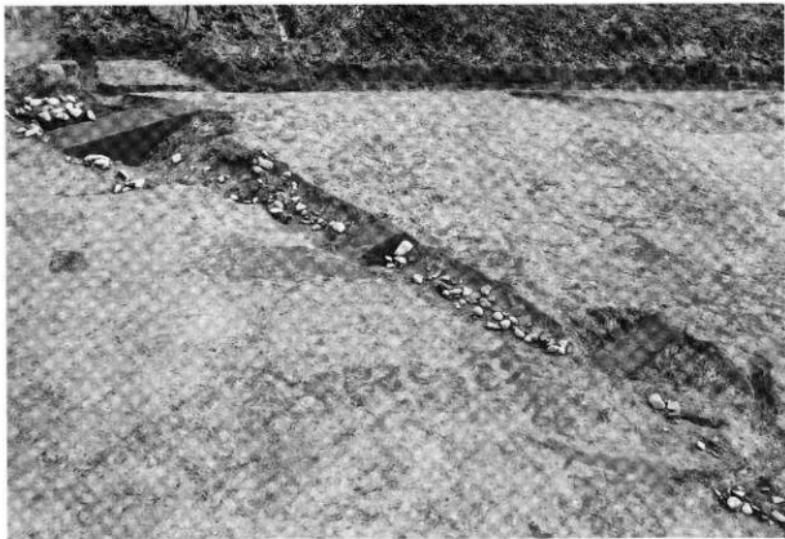
2. 溝SD 19全景(北西)



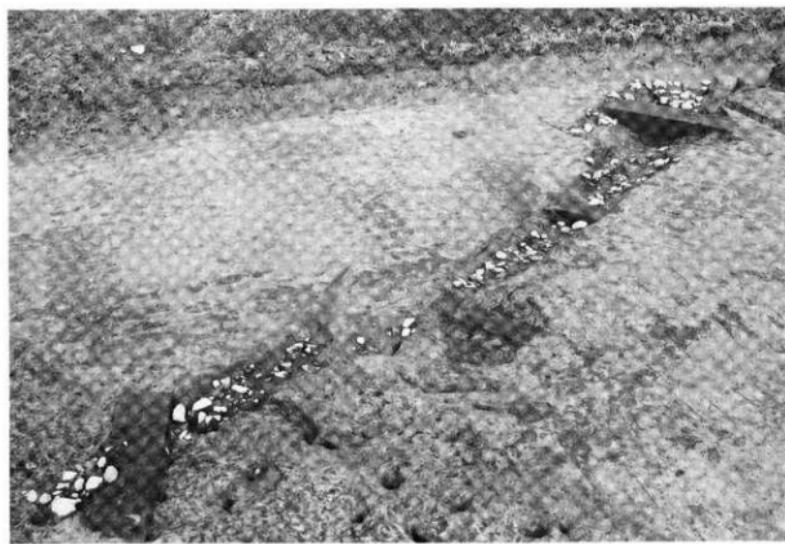
1. 溝 S D 21 全景（北）



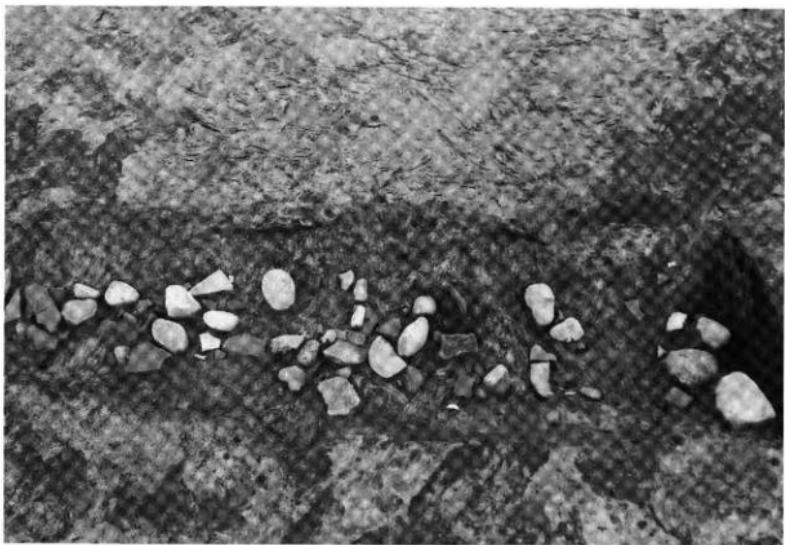
2. 溝 S D 21 全景（南）



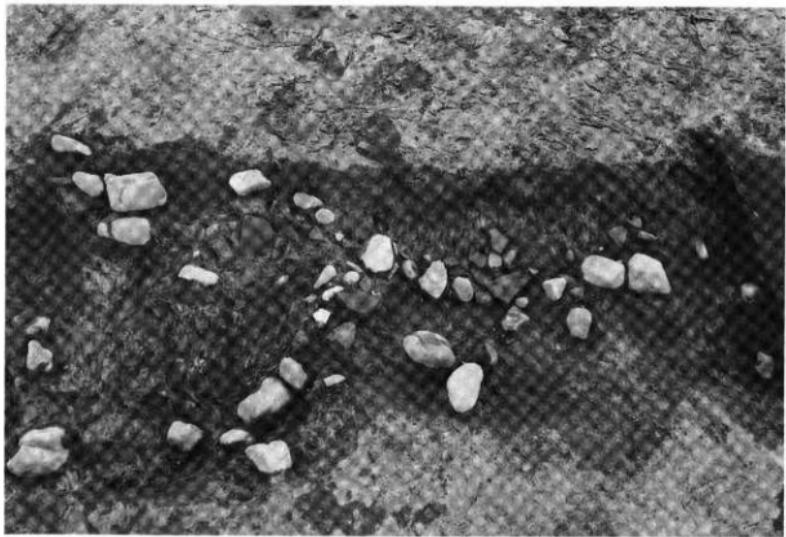
1. 溝 S D 21 東側部分全景（北西）



2. 溝 S D 21 東側部分全景（南西）



1. 溝SD 21 東側部分近景（南）



2. 溝SD 21 東側部分近景（南）



1. 溝 S D 21 勾玉  
出土状態（南）



2. 溝 S D 21 勾玉  
出土状態（南東）



3. 溝 S D 21 勾玉  
出土状態（南）



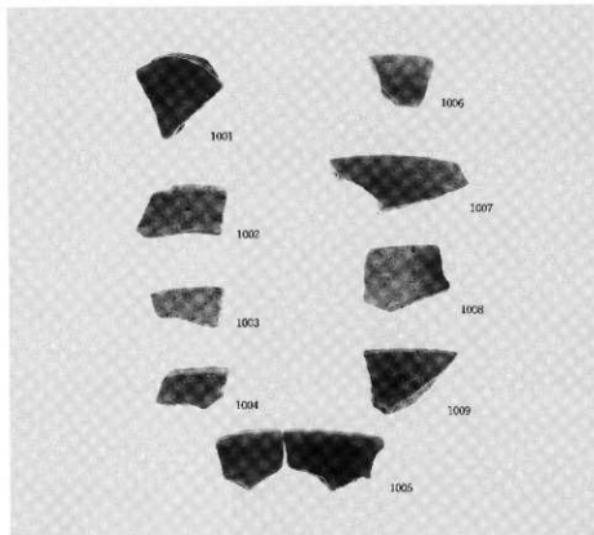
1. 調査風景（南東）



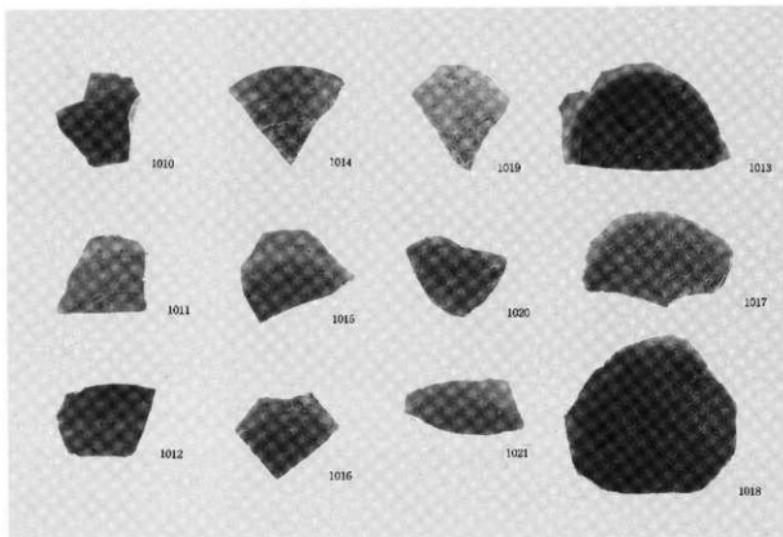
2. 調査風景（南西）



3. 調査風景（北西）

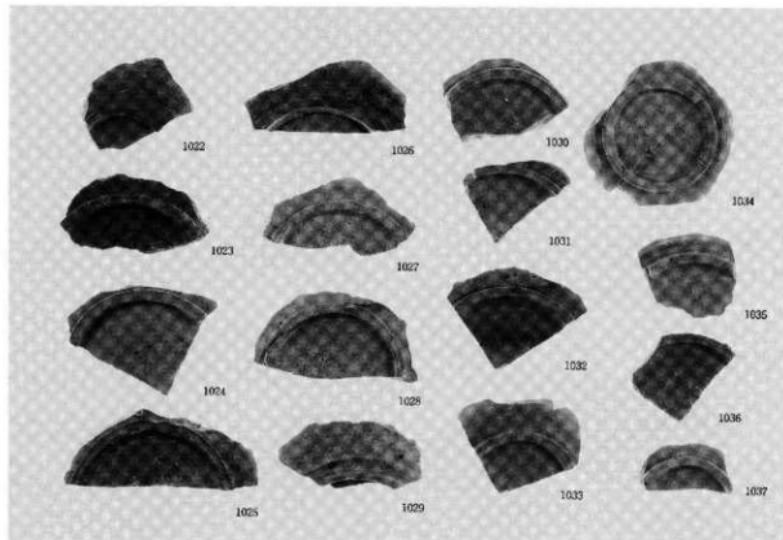


1. 土師器

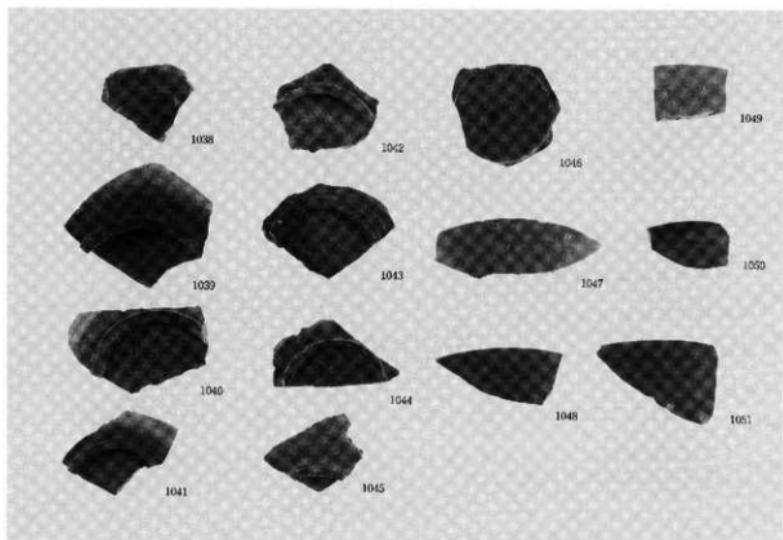


2. 瓷器

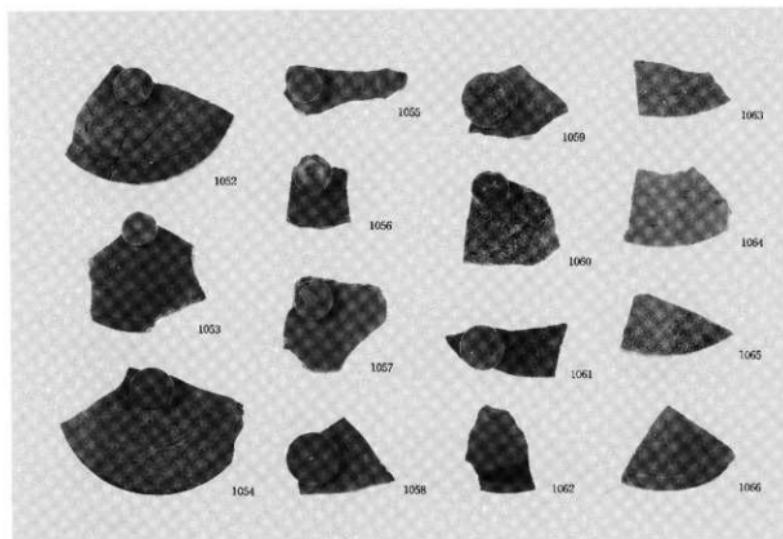
圖版一五 遺物 東木津遺跡



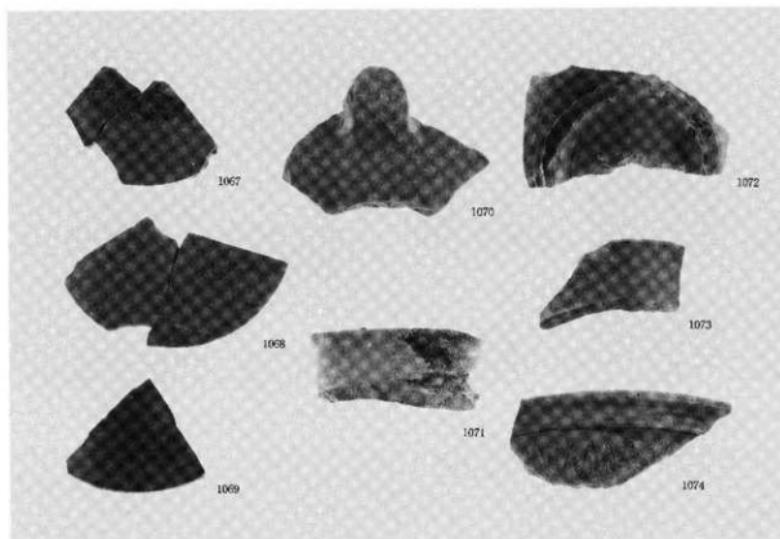
1. 須志器



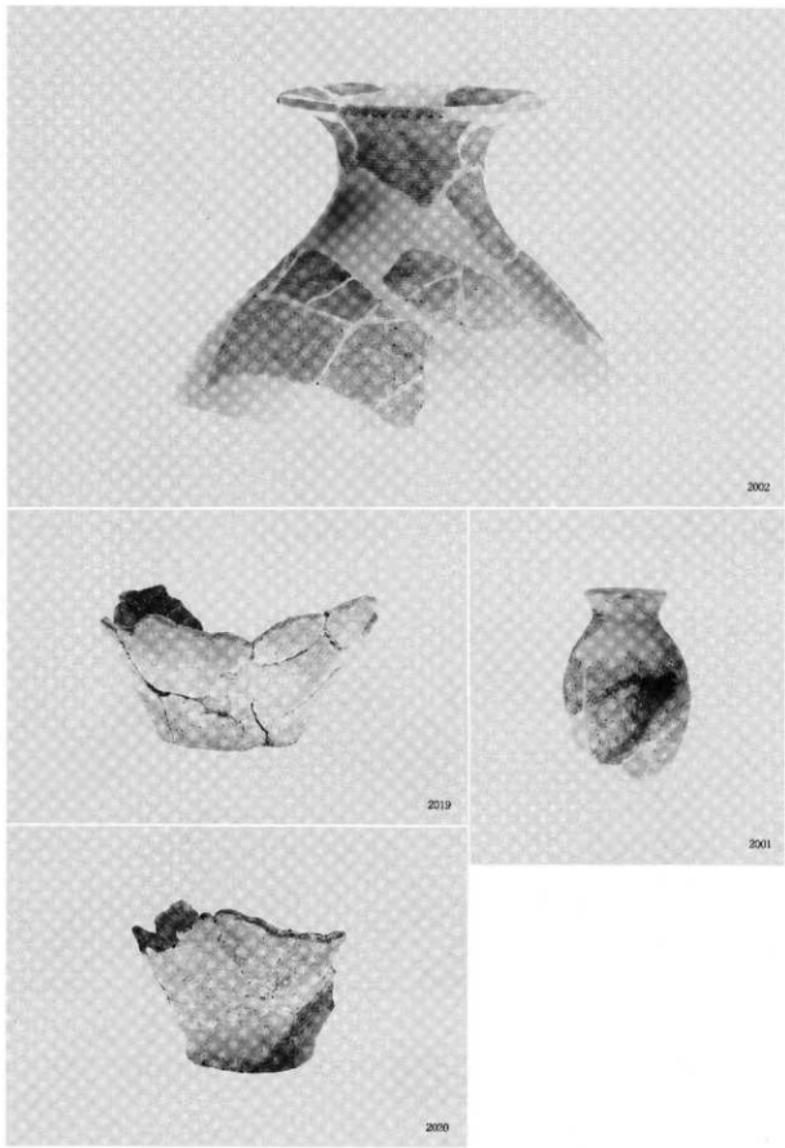
2. 須志器



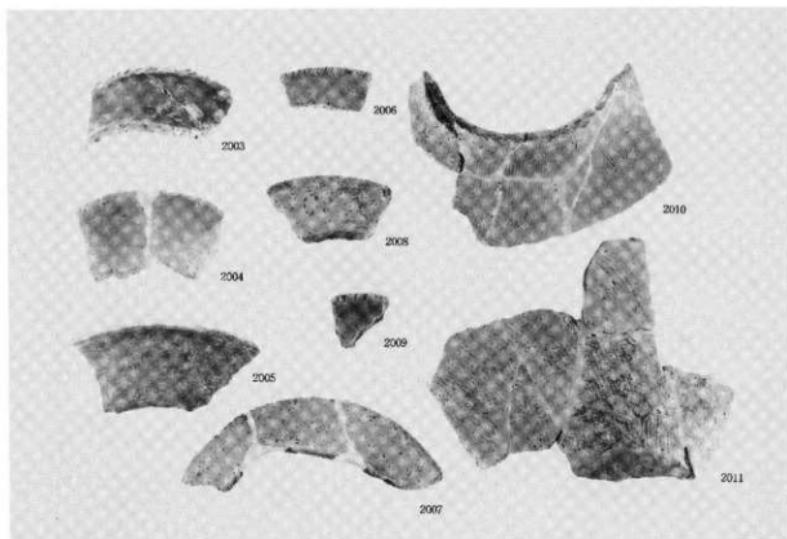
1. 須恵器



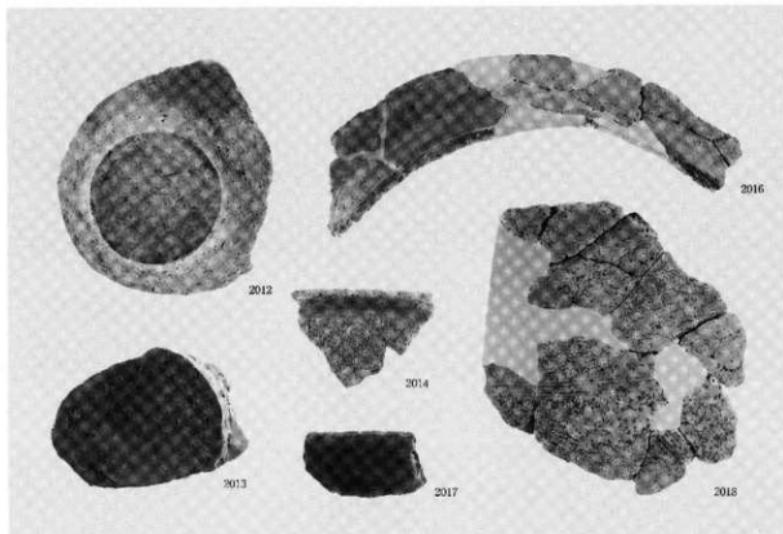
2. 須恵器



弦生土器

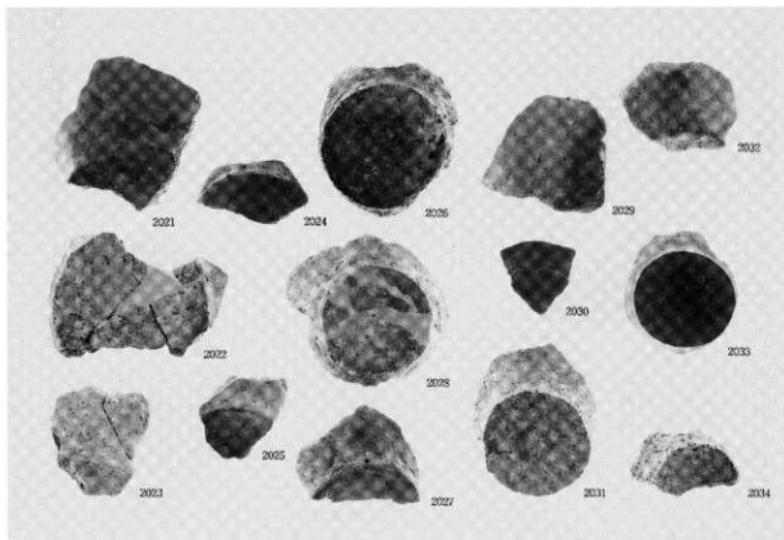


1. 弥生土器

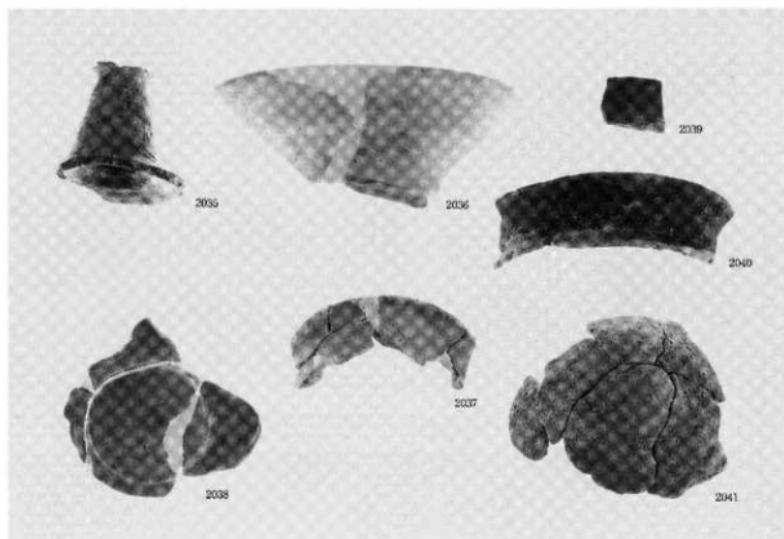


2. 舟生土器

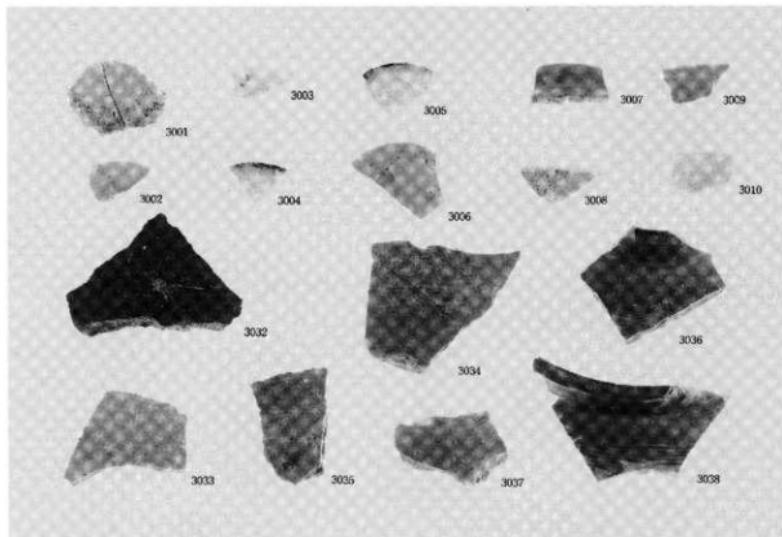
圖版一九 遺物  
石塚遺跡



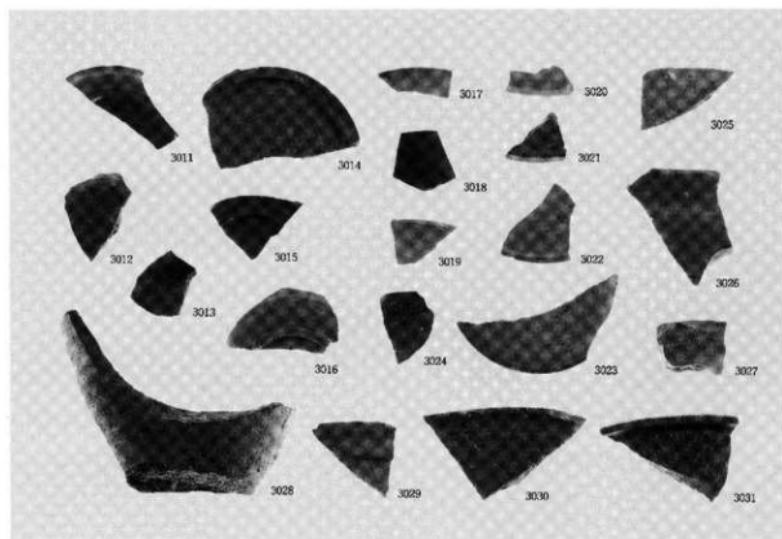
1. 弥生土器



2. 土器器



1. 土器、珠



2. 須恵器



4101



4101

勾玉

## 報告書抄録

ふりがな	しないいせきちようきぬほうご							
書名	市内遺跡調査概報V							
副書名	東木津遺跡・石塚遺跡・下佐野遺跡の調査							
巻次								
シリーズ名	高岡市埋蔵文化財調査概報							
シリーズ番号	第35冊							
編集者名	山口辰一							
編集機関	高岡市教育委員会							
所在地	〒933 富山県高岡市広小路5-70 TEL 0766-20-1453							
発行年月日	西暦 1997年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東經	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因	
東木津	富山県高岡市木津	16202	202150	36度 43分 39秒	136度 59分 41秒	19870222～ 19870331	264	店舗建設に伴う事前調査
石塚	富山県高岡市和田	16202	202158	36度 43分 47秒	136度 59分 09秒	19911024～ 19911106	62	資材置場建設に伴う事前調査
下佐野	富山県高岡市佐野	16202	202151	36度 43分 27秒	136度 59分 41秒	19931115～ 19931215	298	医院建設に伴う事前調査
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
東木津	集落跡	奈良	溝 1条	土師器、須恵器				
石塚	集落跡	弥生	土坑 1基 溝 2条	弥生土器、土師器				
下佐野	集落跡	中世	土坑 1基 溝 3条	土師器、須恵器 珠洲 勾玉				

---

高岡市埋蔵文化財調査概報第35回  
市内遺跡調査概報V

発行者 高岡市教育委員会  
富山県高岡市庄小路7番30号

1997年3月31日

印刷所 平田印刷株式会社  
富山県高岡市野村1485番地

---